

# 溪 犀



No. 19

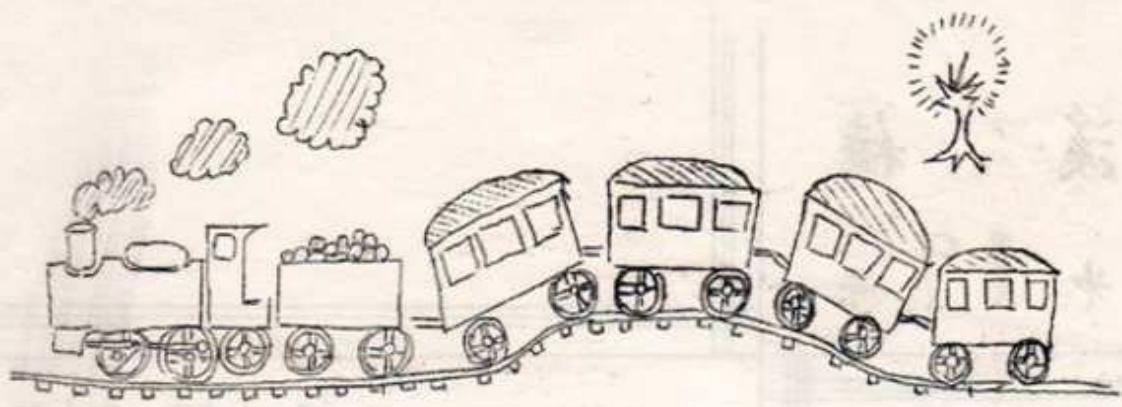
1969年12月

浦和溪稜山岳会

溪 棱  
号 19

空は今日もまた素晴らしい澄み渡つて、岳は美しく輝いている。快い微風が頬をかすめ、暖かい春の一日である。一週間の山旅への不吉な梅根は今は和んで、楽しい追憶のみが口にえつていた。あの白く輝く岳の奥から鄙びた不可思議な旋律が風に乗つて伝つてくる。それが無性に私を引きつける。これを見、あれを聞く時、山へ行くのが苦しいから山へ行くのではなく、また楽しいから行くのでもない。純粹に「一つのものを作り上げること」のみを目指して山へ入れるような、米のよくな山男となることのいかに困難であるかをしみじみと感ずるのだ。

『風雪のビバーク』 松濤 明



溪棲才19号目次

卷頭言

人昭和四十三年度冬期合宿✓

A班 橋高岳岳沢タタミ岩尾根

B班 ハケ無云河原沢

三ルンゼ右俣

人昭和四十四年度新人歓迎✓

丹沢水無川集中

人昭和四十四年度五月連休合宿✓

八海山西面

生金沢右俣

人昭和四十四年度夏期合宿✓

A班 鈎ノ木峠・雲ノ平

B班 錫杖岳・鷹高

錫杖岳本峯正面壁正面ルート

2峯正面壁クラウフルート

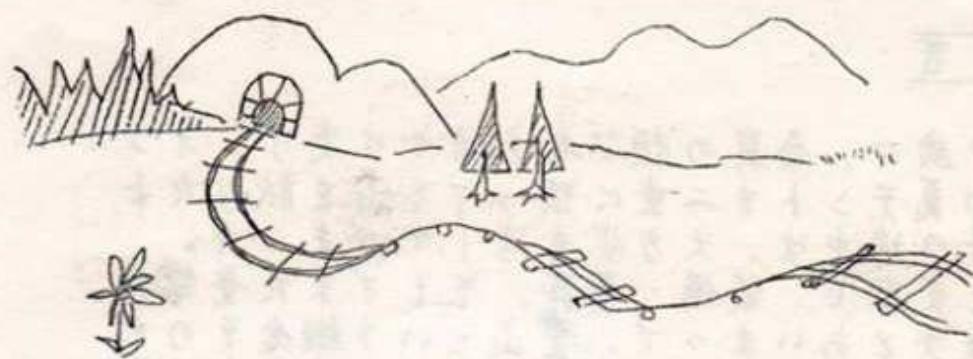
南岳西南尾根

吉野山崎定治  
木田清治

細井信建  
斎藤貞次  
池上秀子  
中野信幸  
井中秀子  
藤原信幸  
上野信幸  
井中秀子  
牧野信幸  
野中信幸  
井中信幸  
井中信幸

細井信幸  
斎藤貞典  
細井信幸  
斎藤貞典  
細井信幸  
斎藤貞典  
細井信幸  
斎藤貞典  
細井信幸  
斎藤貞典  
細井信幸  
斎藤貞典  
細井信幸  
斎藤貞典

山縣昌彦  
奥園義輝  
吉野武子  
山澤典子  
吉澤昌子  
奥園義輝  
吉野武子  
山縣昌彦  
奥園義輝  
吉野武子  
山澤典子  
吉野武子  
山縣昌彦



溪稿第19号目次

八個人山行の記録✓

白毛門山 ↗ 卷機山

(大水上) ↗ 平ヶ岳

北岳バットレス オ四尾根

谷川岳一ノ倉沢中央棲(コップ状岩壁)

浅草山・守門山

幽ノ沢中央壁正面フェイズ

ある登攀(幽ノ沢中央壁左フェイズ)

谷川岳一ノ倉沢四ルンゼ

谷川岳南面川棚沢

谷川岳一ノ倉沢衝立岩ダイレクトカンテ

北岳バットレス Dケリー奥壁コーテルブライティ

南会津の山(七ヶ岳・若海山)

ヨーロッパ日記(前半のみ)

人昭和四十三年度総会報告✓

人会員及び会友住所録✓

吉 山 山 山 山 山 沢 縣  
吉 山 山 山 山 山 田 縣  
吉 山 山 野 縣 崎 田 田 縣 野 縣  
義 昌 定 親 親 昌 典 昌  
輝 彦 武 武 彦 治 一 一 彦 武 子 彦

39 38 34 31 30 30 28 27 27 25 22 20 19 17

## 卷頭言

年々歳々、会員の顔ぶれも徐々に変り、オンボロの夏テントを二重に張つて冬山を試みた。うな昔の連中は、大方姿を消してしまった。山も変容し、装備・用具、そしてまた登攀技術も術の進歩とあいまって、登山といふ概念そのものも、非常に多様化、質的变化をして来たよう

に見える。

しかし、少なくとも近代登山の底流として一貫して流れているものは次の有名なマンメリーノの言葉に象徴されるようなアルピニズムの精神であろう。

「眞の登山者とは、常に新しき登攀を求めつつある人である。その成功すると否とを問わず、その山々との斗いに限りなく悦びを感じる人である」

同時に私はここにあえて、ノーマン・コリーの言葉を紹介して古きたい。

「登山とは單なる身体的運動ではなく、その一部は思索であり冥想の境地である」

「登山者は、ただ山に登ること、それ自身に悦びを感じるものである」

自分にとつて登山とは一体何か、そう問い合わせて見るとき、登山というものの多様性、言葉を変えて言えば深さというものを痛感するに違いない。

会員の一人一人が、まず「自分の山」を登り続けよう。それが組織体としての会の一つの指向性と結びついてこそ、現在進みつつあるヒラヤ遠征計画も、参加できるか否かにかかわらず、全会員のものとしての意義を持ち得るのである。

山縣昌彦

「43年度」

## 冬期合宿

A班 北ア、穂高 鳥沢置岩尾根

B班 人、岳、高河原沢

43年度の冬期合宿は、参加者の参加日数の關係で昨年に引き続き北ア、穂高鳥沢と人ヶ岳におひて行なわれました。

”穂高“

### 鳥沢 置岩尾根

奥園義輝

ハメンバー

(工)奥園義輝 中田 弘

本沢直彦 山崎定治

木田 清

水越 武(日本山岳会)

十二月三十日

松本ヒリタクソード乗り中ノ湯未  
テ入る。大荷物共K、一台の車に乗  
つたのであるが、車はまるでへし  
折れ手に成り、あえき／＼中ノ  
湯までの悪路を登、て行つた。

上高地の木村小屋からは人通りも  
少なく、我々だけの山とい、た感じ  
。ベースは昨年の場所より少し上  
の大台地の上に置く。積雪約一メートル  
、夜、氷越民到着。

十二月三十一日

私と中田君二人が先登でルート工  
作、(1)予定地は置岩尾根の約1/3の所  
。風雪ほどくるト確認に時間を食  
う。ラッセル探し。雪崩沢を横切、  
天狗沢本流に沿、て登る。このあ  
たり腰までのラッセル。雪崩の危険  
性有り。最初の巾広ハルンセド取り  
付く。傾斜がきつく小規模な雪崩を  
数回受けける。左の支尾根に上り、十  
メートルの高さを持、壁ハイツク  
ス工作。ここでかなりの時間費食  
た。後発の荷上げ隊も合流。岩場イ  
はせば、強ハ傾斜を持、支尾根で  
テツセルに大変なエネルギーを使  
う。次々にファックス工作をしながら  
も登るが、ほど降雪の為に遅々と  
して登行ははゞれない。

ブソンニの壁にルート工作中、頭  
上の巾広ハ尾根から落ちてき大雪崩  
の為に、本沢、木田の両君が飛ばさ  
れてしまい登行を中止。すぐ二人  
を収容すべく狭い尾根にテントを張

る。幸い大事に到了ずホッとする。

この日は三人がベースまで下る予定であつたが、事故の萬全員がCIである今の位置にとまる事にする。

一月一日

本沢、木田の両君には船がつき沿斐ベースまで下る。ひどい降雪で、テントは半壊の状態。CIのメンバーは一日停滯。このままの状態が続ければ行動は不可能になってしまふ。

途中で私が雪底を踏み抜き、半分程体が落ちてしまふ。足の雪のために継と宇宙の場が見かけにくないのである。再び壁に突き当たる。ここを通過するのではなく、時間を食つた。足が強くなり顔面に雪片が当り、ヒリヒリ痛む。

壁の上から積雪がひどく、胸まで

もぐる様に化す。十メートル程ラクセルしてみたが、これでは一日中やつても百メートルとは進めない。

大規模な雪崩を誘発してしまったので、ここから引返すこ

とに決定。一旦敷だ駆け降りてCIへ戻る。又々雪と风がひどくなる。

一月三日

昨日までに較べ、いくらか降雪も少なくなつたが、ラツラツで機嫌まで上ることにして出発。

一月四日

下山とする。雪崩の危険性が強過ぎるために、全員顔が引きこもる。尾

根上でも厚さ一メートル程の雪崩が跳出。幸い中が空いたため、木べしが4つりていれば大丈夫である。

天狗沢本流、雪崩沢のトラバース

はま、たく必死の思い。アンザイレン

ンして、一ビグチ、ごと越む。ベースに着いた時はまた起死回生の思いである。たゞ降り止ぬ雪の中を上高地へ下り、すぐ下のままで湯まで歩き投宿。

無事下山でき大事を喜び合ひビールで乾杯。

木越氏は引継ぎ仕事のため、上高地へ留まる。

一月五日

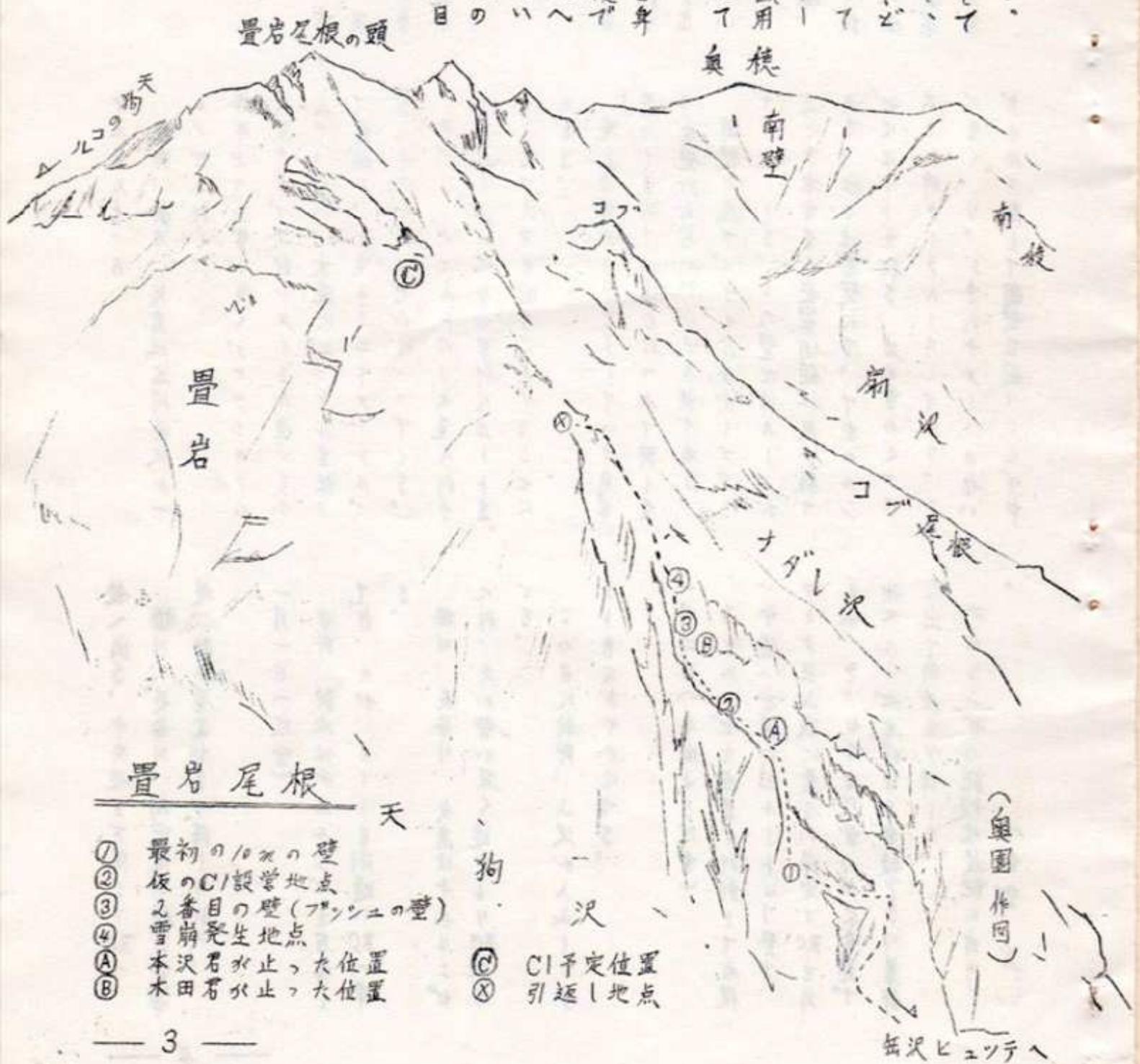
次第まで歩きバスに乗り、新島まで。皆、疲れた表情で電車に乗る。

## 後記

今回の合宿はまた多くの失敗に終つてしまつた。予想もしない悪天の為、本沢、木田の両君が雪崩に巻け

されるという事件まで折り込んで、考えてみれば、当初の計画からしてズサン極まりないものだ。たので、これで成功していくも、うれこらずかが狂っているのである。待つて行、たテントには2張共にパンツ一付けておらず、ふろうじて標識用の竹竿で間に合すなど、どう考えてきまどもではない。

しかし冬の穂高の雪の恐しさを身もって知ることが出来たりは収穫であった。これなどはただ壁だけにへばり付けていたりでは、あからない。今回の教訓を生きて我々は、次の段階へ進まねばならぬ。大きな目標にマラヤを目指して。



# "ハシホ"

## 広河原生活

十二月三十一日

吉野、鈴木、矢島は広河原沢を一  
ルンセへ行く。

ヘメンバー

牧野要雄、吉野武、  
掛川俊之、矢島実、  
鈴木三郎、長谷川天香

十二月三十日

雷士見よりバスにて立沢へ。  
食事後すぐ近くの菓子店に行き、店  
の女がばさんと農家の車を有機電話で  
頼んでしまう。(車代一千円)

小休止後、バスを付けて前述。  
河原と旭小屋との分歧点の所までい  
つてもうう。(車代一千円)

小休止後、バスを付けて前述。  
二日前十時に左便出合に着きBCを設  
置する。BC設置後、鈴木、矢島は御  
小屋尾根の最高コルへ下降路の偵察  
を吉野、掛川、長谷川はアミダツ前  
橋の偵察へ。

鞍へ出る。中央鞍を下降してBCへ。

掛川、長谷川、周安は前橋を登攀  
後、御小屋尾根を下降してBCへ。

一月一日(反雪)

吉野、鈴木はオニルンゼを目指し  
て行、たが、ルートを間違いBCへ帰  
る。

掛川、長谷川、矢島はオニルンゼ  
に行、たが雪が深く途中よりBCへも  
どりて大港を回りこんでルンゼに  
もどる。

立沢上は雪がクレースとしていて足が  
登りでもあり、迷むにつれて笑くな

り奥壁がおいかじる様である。

この日は牧野、山沢が入山してテ  
ントも立ぎやかになる。

一月二日(午后より反雪)

オニルンゼを全員で行動して右俣  
、中俣、左俣の三ルートより登り、  
アミダツ前橋に集合の予定でBCを出  
たが、ラツヒルと反雪の轍に全員で  
カ三ルンゼ右俣より前橋下3の着部  
に出て南橋を下降した。

カ三ルンゼの記録は後記に有り  
ザイル下降して奥壁を回りこんで中

(吉野 武)

# 阿弥陀岳 広河原沢

オミタシゼ 右俣

山沢典子記

一月一日

昨夜一晩中降ったとみえ、あたり一面は大きな新雪の被帽子をつけている。今日下山する岡安さんとBC附近で別れる。私達總勢七人は一路オーリンゼへと向かう。

昨日つけたトレースも消えてしまった程に雪は深い上に彼らのペースは速くついていくのが構一杯である。ただ、ひたすらに前の人の路を追う。

正月の広河原としては雪が多いとするとしてサラリとした新雪はとも長いた。ブローナモジナラシヨンの大滙を左上に見る様にればとうやくオーリンゼの出合である。

Y一歩前で登攀器具を身につける。この頃より雪が降り始める。それ下

ん、矢高さんとザイルを組みテントのバーべイにはま。

牧野さんが下の氷瀑をカツティングしながら登って行く。P1より急な雪面を越して下る大滙の下に出る。出口が悪いらしく本のアイス人トケンを打ち込んでいる。

雪が強く降り始めてきた。カツティングされた上にも、もうたひび白くつもつしている。

コールが有るまで待っている時間の長かったこと。手の先も足の先も今までに経験したことのない大滙が痛さが走っている。待ちに待ったコールが有り登り出す。

アイゼンをブーツに置いて頭の中ではどう考える。やりあがめ、冰が体がうまく動いてくれない。急斜面雪面をあえきながら登り、いくつかの氷瀑を越える。

右俣、中俣、左俣との分歧点の下の岩陰で一休をして以後の行動につ

いてのリードーの注意を聞く。

予定を変更して全員で右俣にルートを取り、右へ右へとトラベースして南棱のP3直下に出る。

雪と風が強く吹きつけるので手のまま雪庇の出ている南棱を下降して、広河原沢右俣に入る。

何回か転倒しながらも何故か私の心は樂しかった。今日一日全ての事が私が今までに憧れていたことであり、そしてまた新しい一つの憧れへ

の段階であったから。

夕闇迫るBCに五時着。そして再び見上げる阿弥陀岳は深い灰色のガスに包まれていた。

(一月三日 下山)



# 45年度 新人歓迎山行

## 「丹沢 水無川」

「何もかも始めて！」

### 齊藤 貞藏記

四月十九日、新宿発二十二時四十  
五分の丹沢号で出発、休日の前夜の  
萬が、山に行く人がすごく多いのに  
おどろきました。

渋沢と言ふ所に着いたのが二十三  
時五十分頃であった。それからバス  
で大倉まで夜中のきれいな星空を見  
ながら歩き歩いて戸沢の出合へ。

自分も登る沢はモミソ沢と言うが  
だ。始めてのことでも配であります  
たが、先輩が色々と友達を使つて下さ  
つて歩き方や登り降り、ザイルの結  
び方、カラビナの使用方法、等を教  
えて下さり大変勉強でした。

翌食後、モミソ沢出口の所で岩登  
りの方法や注意の話を聞いたり、ザ  
イルを使用しての確保や下降の手法  
を勉強する。始めはと、でもむずか  
しい気がしましたが、とっても下降  
は終、てから気持ち良かつた。

テントを張って寝たりが二十日の  
四時少し前である。自分は何もかも始  
めてなので、用具も持つてないし背  
中が痛いし冷めたい。それでも少し  
寝むれだ。すぐ隣りのどこかの連中  
が「と、でもやあがしくて大変にう  
るさかった。山に登る仲間は特に他  
人に迷惑のかかるようなことは、絶  
対にしてはいけないのでわざい」と

朝、西三河有る峰々がとても朝日  
に照る十和田美しい。  
金華山、十五ハガ五ペーティーK三  
人づつK別れて了れ、予定入沢して行  
へた。

### セドの沢 左俣

### 細井 信幸記

十九日夜、新宿発の丹沢号にて渋  
沢駅下車して大倉へ。大倉にて遅い  
夜食をと、大倉、戸川林道を歩いて  
戸沢出合でキャンプ。

新人歓迎の山行なので先輩達はと  
ても親切である。なんだか交感感  
じた。就寝午前三時半、起床六時。

朝食を食べた後、パーティの発表  
があり僕はセドの左俣になりました  
。僕はと、丹沢は3度目ですが沢  
登りは初めてです。

水無川を登つて行くと最初の滝F1  
が現われた。セミハメートルはあ  
のうちか、まず吉野さんが直登する  
ので、出発前に心配であつたが、先  
輩皆さんが親切で明るい人達だし、  
天気も良か、たゞ疲れなくて全々

感じませんでした。ただ、二、足に  
豆が出来ているのにも始めて気がつ  
きました。又、登りました。  
セドの沢 左俣

越へた。ここで小休止木ヲトする。

ここから沢が二つに分かれ、右手

の沢がセドの沢、左手の水無川本谷

・セドの沢に入り左俣ルートを取

る。小さな滝をつきつきに乗り越した

。しばらく登って行くと大きな滝が

現われた。十五メートル位にはあち  
うか、全員しばらく立ち止まつた。

まず吉野さんに岩登りの基本知識  
をあそわる。佐藤さんがトンブに立

つた。滝の左側をルートにしたが、

取付きが悪いでとまどつている。

ハーケンが打つてあつたりでカラビ  
ナを掛けて側壁をトラバースぎみに

登つて乗越した。つづいて小林さん

、そのつゞくに横穴登つた。清水さん

、吉野さんの二人は右の側壁を登つ

た。緊張したりか、のどがすごくか

わいたりで沢の水まりんだつめた

くつとつてもうまかつた。

大滝を越へて、いくつかの小滝を

越へて行くと沢に雪がある様になつた。

首すじ縫縫が見えず、もうすぐ

だ。沢をながめ行くとだんだん開け

てきた。右側の斜面をヤブやササに

なやまされながら登り、なんとか表

尾根に着く。雪女山だとても美し

く見えた。

鈴木さんに「どうだい、おもしろ

い、たとうじ」と言われて僕は「おも

しう」ですね。と思わず、につこり

答えた。

△ペーテイの編制は十五名を三名づ

つ五ペーテイにする。入沢一走沢は

モミソ沢・前茅・沢・源次郎沢・七

ド・沢・右俣・左俣とニペーテイの

予定であつたが変更して二ペーテイ

で左俣への四沢です。各沢を登つ

た後、全員でモミソ沢出合のケンス

イ岩で岩登りの基本訓練をおこな

つた。

△大日町に早朝に着く。一番のバス

乗り岡村にちりる。ベース北点、二

合目までここから歩く。天気も良く

、人海山が目の前に待ちかまえてい

る。勇大な眺めだ。それにしても暑

い、重いテントがなかなか重く感じ

る。途中、店によつて酒を買つ。人

海山と言ふ名の地酒だ。(かる口だ

すうです)

約二十分歩いで二合目のベース地  
に着く。さっそくテントを張り休息

45年度、五月連休合同山行

## 人海山西面

細井信幸記

五月三日

二日夜、上野発二十三時二十一分

の急行に乗る。三日間の連休とあつ

て上野駅の混雑はものすごかつた。

よくもこんなに人がいるものだと我

ながらおどろく。

△大日町に早朝に着く。一番のバス

乗り岡村にちりる。ベース北点、二

合目までここから歩く。天気も良く

、人海山が目の前に待ちかまえてい

る。勇大な眺めだ。それにしても暑

い、重いテントがなかなか重く感じ

る。途中、店によつて酒を買つ。人

海山と言ふ名の地酒だ。(かる口だ

すうです)

△約二十分歩いで二合目のベース地

に着く。さっそくテントを張り休息

する。

△大滝を越へて、いくつかの小滝を

越へて行くと沢に雪がある様になつた。

△首すじ縫縫が見えず、もうすぐ

リーダーが今日の行動予定発表  
があり、新人は雪上訓練、他の会員  
は明日登攀する各次の偵察との事。

十時にベースを出発する。僕達新

人と女子会員は奥園さんのコチに

より、屏風次四合目の雪渓にて雪上  
訓練をする。まず、雪上を歩く練習  
、つぎにアイゼンを付けた場合の歩  
き方、ピックルの使用方法、滑落停  
止の練習を行なった。簡単な様だが  
雪がよごれていた。さればしてか  
ら昨日の練習を行なう。ピックルを  
使用しての滑落停止など、一通りや  
つた後、自由行動になりました。僕  
達新人は大滝沢出合の大滝の方に行  
って写真をぱりくどつて楽しめま  
した。

四時頃、夕食のカレーライスを作  
り始める。肉が悪くなつていて、  
けつこう食べた後なんでもないよ  
うでした。

夕食後、みんなでキャンプフ

アイヤー、みんなで楽しく歌い  
ました。真赤に燃えていた炎を  
見ていて遠くへいるあの娘を  
思ひだすよくな、ちよ、ぱりと

淋しあるは、でも仲間つていひな  
ち——。

人時三十分寝る。あやすみなさい

くまペーテイを待つことになった。  
二時になつき松を出発してベース  
にもどる途中でたき木ひこひきみん  
なです。

ベースにもどるとさっそく酒を買  
つていいと言わせた。新人はつらい  
よ、と口では言つてはいるが内には冷  
たいピールがのめると思うと「しめ  
たし」と叫ぶたいくらいだ。鈴木さん  
と池上君と僕の三名で出かける。買  
つた後、自由行動になりました。僕  
達新人は大滝沢出合の大滝の方に行  
つて写真をぱりくどつて楽しめま  
した。

四合目に十二時に出発、これから  
山を登るうつの事。途中で牧野さん  
達のペーティに合う。尾根はもうす  
ぐく暑いと書いていました。急な登  
りをどんどん進む、たしかに暑い。

今夜も八海山のふもとまでちして  
い了様に真赤な炎は燃え、山男の明  
るい笑い声はいつまでもいゝまでも  
つづいていた。

四合目を十二時に出発、これから  
山を登るうつの事。途中で牧野さん  
達のペーティに合う。尾根はもうす  
ぐく暑いと書いていました。急な登  
りをどんどん進む、たしかに暑い。

五月五日

今日はテントをたたむ人、足を登  
る人と二つに分かれ、僕と十数名  
は名もあからねい次を登る。けつこ  
うきつハ雪渓があり、緊張せられ

五月四日

る所もあり、てみかせかたもしない。

十時半頃、新聞道の稜線へ出る。

ながめがすごく良い。三日間つづく大連休もこれで終りかと思うと、淋しい気持ちをする。

十一時にベースにもどる。すぐバスにまたあうように出発した。

「八海山七又、合二日までサヨウナラ。僕はそっとバヤいた。

十一時、大連の真下まで行く。

東晴らしい暖め。

自分が空虚と溶け合ってくまう桂林いいよ」のほい満足感を覚える。

午後、尾根を登る。

雪くて、とてもきびしかった。

大合目で折り返す。

白蓮の白が印象深かった。

五月三日

山道を歩いている自分に気づく。

暑い。

雪は消え残っているがそれでも暑い。

「また、山に来ていい。ボンヤリ考えながら歩く。

十一時、雪上訓練。

水分が多い雪の斜面をこころげもある。滻の音がのどのからきを増させる。

ガサゴソ、音をさせてかきわけて行く。

午前中、雪上訓練。

確保とグリセードを新たに教える。あれネズミになりながら、皆、結構楽しむのだ。

十一時、大連の真下まで行く。

東晴らしい暖め。

自分が空虚と溶け合ってくまう桂林いいよ」のほい満足感を覚える。

午後、尾根を登る。

雪くて、とてもきびしかった。

大合目で折り返す。

白蓮の白が印象深かった。

五月三日

山道を歩いている自分に気づく。

暑い。

雪は消え残っているがそれでも暑い。

「また、山に来ていい。ボンヤリ考えながら歩く。

十一時、雪上訓練。

水分が多い雪の斜面をこころげもある。滻の音がのどのからきを増させる。

ガサゴソ、音をさせてかきわけて行く。

やつと明るい世界に出たと思う。たら、少し、登ると言ふことでガツクリする。

下りは人間らしい道を下る。

障害物はなつかたが、足がガツクリになる。

椿の花と沢の音とにベースが近くかなってきたら感じると、ホソとする。同時に、「ああー、もう山とも、お別れか」と、淋しさを感じた。

暑い。

雪は消え残っているがそれでも暑い。

「また、山に来ていい。ボンヤリ考えながら歩く。

十一時、雪上訓練。

水分が多い雪の斜面をこころげもある。滻の音がのどのからきを増させる。

コース タイム			
5月4日 BC(2合目)	6.15	5月3日 6日町駅	6.25
4合目	7.05 12.00	小学校	7.40
6合目	13.30 14.00	2合目(BC)	8.00 10.00
BC	15.30	4合目	11.00 15.00
5月5日		BC(2合目)	16.00
BC 棱線	7.45 10.00		
BC	11.25		

生金沢右俣

牧野要雄記

五月四日

今日下山しなければならぬと定繩、掛川の三名でペーティを組んで生金沢右俣に入ることにする。

屏風道と分れて両岸には山桜が咲く明るく幅広い雪渓の生金沢を登る。左俣とおぼしき沢の出合にて左俣ペーティの吉野君ら三名と別れたが二十分もしない内に生金道尾根のヤブさかきあけてもどってきた。左俣は雪渓登りで豪爽意欲をもぶれてしま、たとのこととて共に右俣を登る。右俣も雪渓が長々とつづいているだけだが、両岸には不安定なプロンクがひつひつているので足をゆるす事は出来ない。しかし、見下す魚沼の緑の平野に銀色に輝く魚沼川の蛇行が美しく、雪渓登りの草調さま忘れさせてくれる。

妙義山や西部劇の岩山を思わせる様な奇怪な岩峰を頭上にあおぐ娘女

リ、やつと滝が現あれてきた。

最初の滝は雪面を割りて水量の豊かな滝で高さは雪に隠されてあからぬ。岩質が凝灰岩の様な砂と砾利が固まつた岩でペーケンは使用出来ぬので直登は望めぬ。右岸を岩をへづつて草付き登り滝上へ。

はあき雪渓をしばらく登ると小さな壁が左岸より岬状に幅広く沢筋を塞ぐ様に出て、す所に着いた。沢筋

に沿つて左へ回り込んだ掛川は崩壊したプロックを胸に受けてしまつた。右へ回り込んだ私達はシユルンドを大きく跨いで上方のホールドに飛びつく様に岩を登、たゞ、足下のシユルンドが真黒な口を開けて底知れぬ深さは気味が悪かつた。

下山を急私達は暑さに悩まされながら、又、時にはその暑さを忘れたりの岩を登つて滝口へ延びているバントに立つ。バントよりカント状の岩を登る。ここでザイルを使用して

エボウ登りで時間を稼ぐ。

沢は滝上よりは一度は広い雪田になるが、すぐにはブッシュ帯に細い流れとなつて消えて行く。テラ雪田の上部を横切つて生金道が走つていたが今は雪の下である。

ボツシユをかけて、生金道と思える所をえろびながら右へ右へとトラバースして屏風尾根に出た。屏風道の七合人杓の所だった。

はるかかなの大滝沢上部の雪田を登つて中田ペーティの小さな人影が見える。エコーをかけると上方の山陰より屏風沢ペーティの声も響つてきた。

下山を急私達は暑さに悩まされながら、又、時にはその暑さを忘れたりの岩を登つて滝口へ延びているバントに立つ。バントよりカント状の岩を登る。ここでザイルを使用して

44年度

# 夏期合宿



針木～五ヶ原～雲平  
錫杖岳～猿高岳

昭和44年度の夏期合宿は、新人を中心とした  
縦走班と、錫杖岳生活及び猿高岳（冬期合宿の  
復査）の班に分れて行なわれた。  
(註) 以下はこの合宿の概要です。

## A班（縦走パーティ）

八月四日

まいました。

(工) 鈴木孝雄  
細井信幸

入が遅ハ。

途中、僕が今も血を出してしまい皆さんに迷惑を掛てしまつた。

雨が降つたりやんだり。五時間ぐらいたまうか、五色ヶ原に着いたがテント場はかなりこんでいた。

テントを張りあえてから五色小屋に行つた。小屋のおやじが明日の天気は大丈夫、台風はこない。(雲の流れと長年の感)とおしえてくれた。夕食前に明日に予ねえて金員ビールでカンパイした。

### 細井 健次記

八月大日

二時半起床、前日雨の為に停滯してしまつたので、今日の予定はヤク師次だと言われてみんな頑りきつて四時四十五分に出発する。

鷲山からはいよいよ北アルプスをしく登山路には草木もあまり見ることができず、ただ石ころだけの道をひたする歩いた。

天気もだいぶ良くなり左手に黒部

の流れが手に取る様に見え、しだいに山の高さは高く成り三十メートルに手がどくぼくまで登つた。

しかし、僕の体力は消耗してしまつてこのすばらしい景色の所であり

ながら、カメラのシャッターを押す元気さえもなくなりました。もう、ただ休息だけを待す望みが、歩きつづけてどうにか薬師岳(三九二六m)に立りました。

さすが頂上に着くとホントに本当に自分の足でこの山を征服したのだといふ気持ちになり、だいぶ空想を心付つて寝上で五分ばかり横になつてしまつた。

三時三〇分に薬師岳支峰に下ります。今日の予定地である薬師次には行けそうもないひで、薬師平に草喰する事に変更に成つたり、足も軽くなり少し下る。黒部川の急流はすばらしかつた。つい橋を渡り、一気に雲ノ平への登りにかかる。

昨日の疲れがまだ少し残り、せかせか思うように進まない。でも雲ノ平に登りつづいて始めて見るすばらしい自然の美に、なんとも言えなかつ

人月七日

山に入つて五日目、今日は二時起床の予定であつたが昨日の疲れが残つてしまい、一時間オーバーの三時に起床。でも、みんなまだくつろい。

五時四十至分に出発。朝からガスが濃く足を強へ。道がすごくぬかるくて足を取られて歩きにくい。

山に入つてから天気が毎日良くなつた。今年は台風にまで、大当りしてつづいてなつておびただしい。誰れか、今年の前人に悪ひやつぶ一人ひとりようだ。俺かも、しれないなど一など歩きながら一人で考えた。

薬師平から太郎山へ、そして薬師次に下る。黒部川の急流はすばらしかつた。つい橋を渡り、一気に雲ノ平への登りにかかる。

昨日の疲れがまだ少し残り、せかせか思うように進まない。でも雲ノ平に登りつづいて始めて見るすばらしい自然の美に、なんとも言えなかつ

た。特に黒部五郎岳の優美は最高である。こん度は、かならず登りて見たい気遣したのは俺一人ではなかつたと思う。

それから日本庭園の石を美しかつ

大。疲れなど、ふゝんでもトまう様であつた。

今日の内に三俣火双六の予定であつたが、連日の悪天の為に思う様に行動出来ない。雲ノ平キャンプ場に二時に着き、明日の豪気を養う為に幕営の準備をする。

夕方、雲の切れ目から見える青々空と遠くまでつづく山波、やゝぱり山登りはすばらしい。この気持いいつまでも忘れない様にしたいものだ。

斎藤貞蔵記

八月九日

雨の中を三俣連草に向う。  
出発して間もなく雪峯からハイマツ帶へ突入して祖父岳の右支まく、道に出る。やがて道は急ぐ下り始め、

十五分位で下の雪峯に出る。

三俣連草小屋への登りが始まる。二三十分の登りで小屋に着く。風と雨が激しく、小屋の陰で休憩。

A隊に電話で連絡をとる。

横尾小屋に連絡して伝言を頼む。天気も回復の見込みなく、又一日の停滞で行動予定も遅れ、パーティの疲労がはげしかつたので、A隊との合流をあきらめて湯宿へ下る。

野中秀子記



### B班(錫杖岳・穂高岳パーティ)

期日	ルート	メンバー
8月3日	(錫杖岳) 宝温泉 — BC(岩小屋) 前衛フェース、左方カニテルート 北沢 本峰正面壁偵察	中田、本文 山崎、長谷川 吉野、矢島、木田
8月4日	BC	全員
8月5日	雨の為に停車	1
8月6日	本峰正面壁正面ルート 〃 左ルート(新ルート) 錫杖沢、柴中沢 BC — 新穂高	本沢、山崎 吉野、木田 矢島、長谷川 (中田下山)
8月7日	(穂高岳) 新穂高 — 白出沢出合 涸沢岳、西尾根 南岳、西尾根 — 北穂高	本沢、山崎、長谷川 吉野、矢島、木田
8月8日	北穂高 — 上高地 — 下山	

# 錫杖岳木本峰正面壁(正面ルート)

山崎 定治記

八月六日(曇のち晴)

二日も雨で延び今日こゝは何んど  
か登りたい一心で、いつもより早旦  
に出发する。

錫杖沢本谷を詰めて正面壁基部に  
着く。屏風のよう巾広く垂直に切  
立、大岩壁は登攀意欲を盛上げてく  
れる。正面ルートは取付が洞穴にな  
つているのですぐわかる。岩肌は  
乾いていよいよ見えるが、連日の  
雨で大分ぬれていてる。

本沢さんがトップで洞穴の右カント  
状の所から取付く。木ールドが外傾  
していて、しかも岩がモロハのでハ  
ーケンを打つと岩がボロボロと雨の  
ようにならなくてくる。ハーケンが良く  
きかない。下でジッヘルしていくても  
雨のしづくがひっきりなしにボタボ  
タと落ちてきて目や首筋に入つてく

るので、寒気がしてくるほどだ。

十メートル程登り左に回り込んで  
洞穴に入る。更に苦斗しながらハン  
グ気味になつていろいろ所でアブミを掛  
け登り、テラスに立つ。

ザイルがたぐられて僕が登る。上  
部アブミに重心を掛けいで片足を  
乗せた時、アブミがはずれそうにな  
る。バランスが崩れなかつたので幸  
い何んでもなかつた。ハーケンを一  
本打ち直してアブミを掛けジヨヅク  
がねいように静かに登る。

2日目は傾斜がゆるく壁を右斜上  
に登る。

3P・ナムニーの入口は狭く上部  
はトンネルしている。ザックを降ろし  
て、ザイルで後から吊り上げる。チ  
ムニーは体を横にして入るのだがやつ  
とで、アリクンヨンをきかして登り  
5P・核ベ群も終り、苔の生えだ  
崩れやすい土壁を登る。さらに左へ  
巻くようにして登ると縦走路に出て  
登攀を終了。

残置ハーケンは数多く残つていて  
が、入山者が少い為に岩が極度に脆  
かれた。

<タイム	>
BC	15
取終	8. 30
BC	14. 00
	16. 30

錫杖岳本峰正面壁

二峰クラウフルート

(初登) 水田清定

八月六日(壬午)

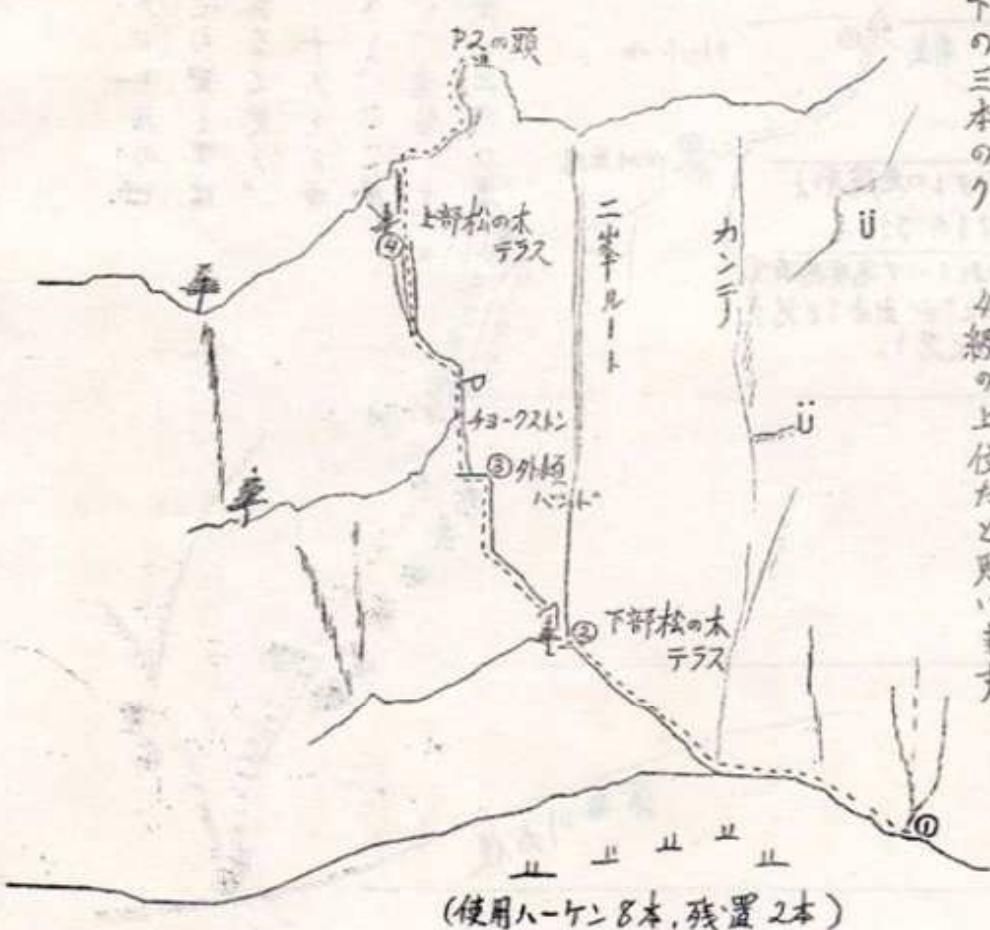
八月大日(雲)  
正面壁ニ峯ルートの左側にある、  
左上している明瞭なクラック状を崩  
ルートを求めてみた。

岩小屋癡六時五十分。右俣沢まつ  
め正面壁基部着八時二十分。

取付人時四十五分。正面壁ルート  
より左に十五メートル程寄つた所で  
引取付く。

ノビツチ(以下ヤに略す)且草村支  
ニ十メートル程トラバースし、松の  
木テラスを目指してクラックを左上  
する。クラックの登り出しへ左側不  
る廻り込む。四十メートル。

2P目、松の木テラスのビナクル  
から吉野君がトツブでホールドの少  
女ハイクラックを登る。一度クラック  
から出て五メートル程登り、又、クラ  
ックに乗り外傾テラスへ出る。二  
十メートル。



37目、キヨーワ・ストンの結まつたクラックを抜けてトラバースし、三メートルほど前のフェースを半分しか入らぬハーベンをスタンスにして乗り越す。右へ三メートル位トラバースして左上していくクラックを登り、上部松の木テラス下の三本のク

た。半分しか入るな、ハーケンにア  
ブミを掛け換えて抜け出す。そして  
ブッシュを五メートルほどこぎ、二峯  
の頭に出る。二十メートル。終了十  
一時。このルートは全体にリスクが乏  
しく、岩が浮いていた。グレートは  
4級の上位だと見えます。

# 南岳西南尾根

## 冬期令宿偵察

吉野  
矢島  
木田  
清実  
武

八月七日

森林帯を抜く。

急であつた二五一七メートルのピークへようやく着く。このピークは

平で幕営地には最適であると思う。

ピークには大人用二張、十メートル

下には一張は十分であろう。ここか

らのながめはすばらしく、滝谷、キ

レット、槍ヶ岳、笠ヶ岳と三六〇度

である。ここより南岳

までは遠松コキで遠松

が大きく、体力の消耗

がはげしい。又、左右

がスッペリと切れてい

て油断の出来ない所が

三〇〇メートル位づ

く。その後は十メート

ル程の岩を登り、少し

進むと南岳西南尾根の縫

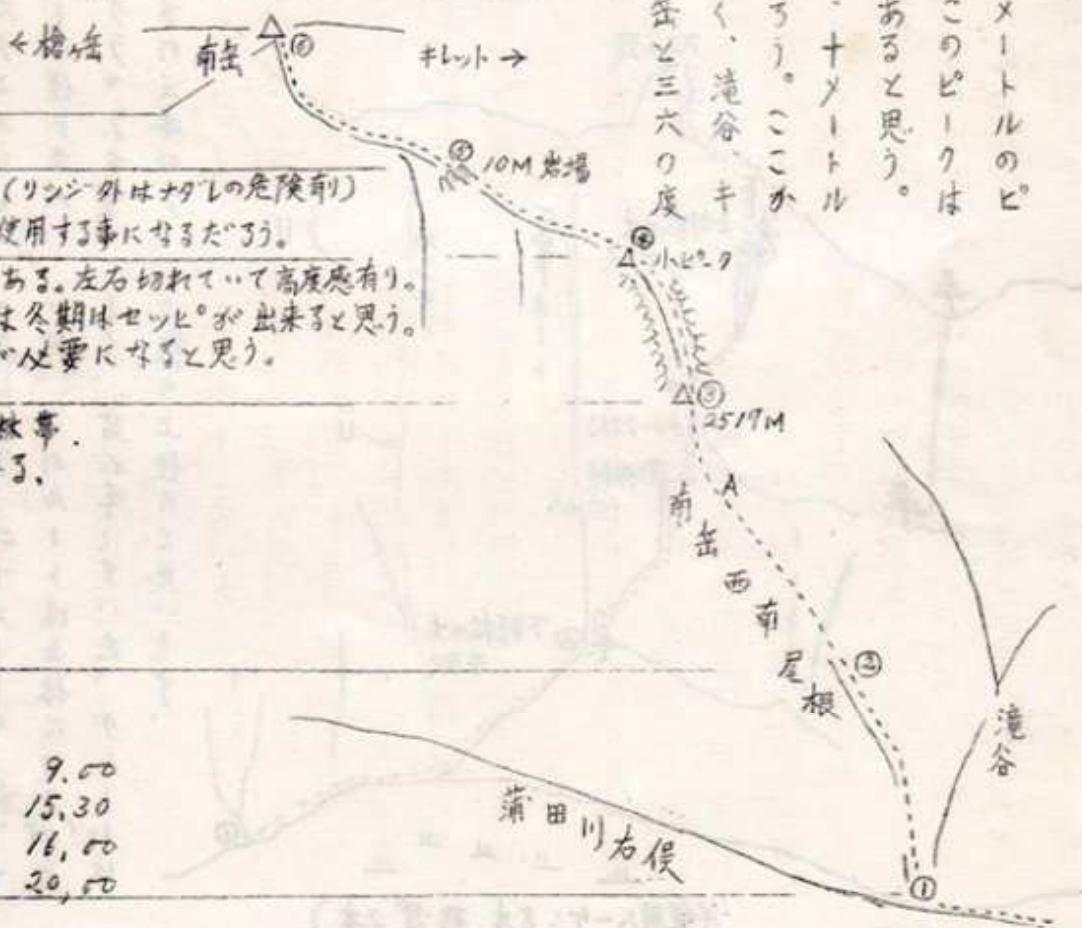
走路と合う。もうすぐ

南岳である。(このル

ートでのキイホイントは二五七メートル大ト

リ南岳までである)

吉野 武記



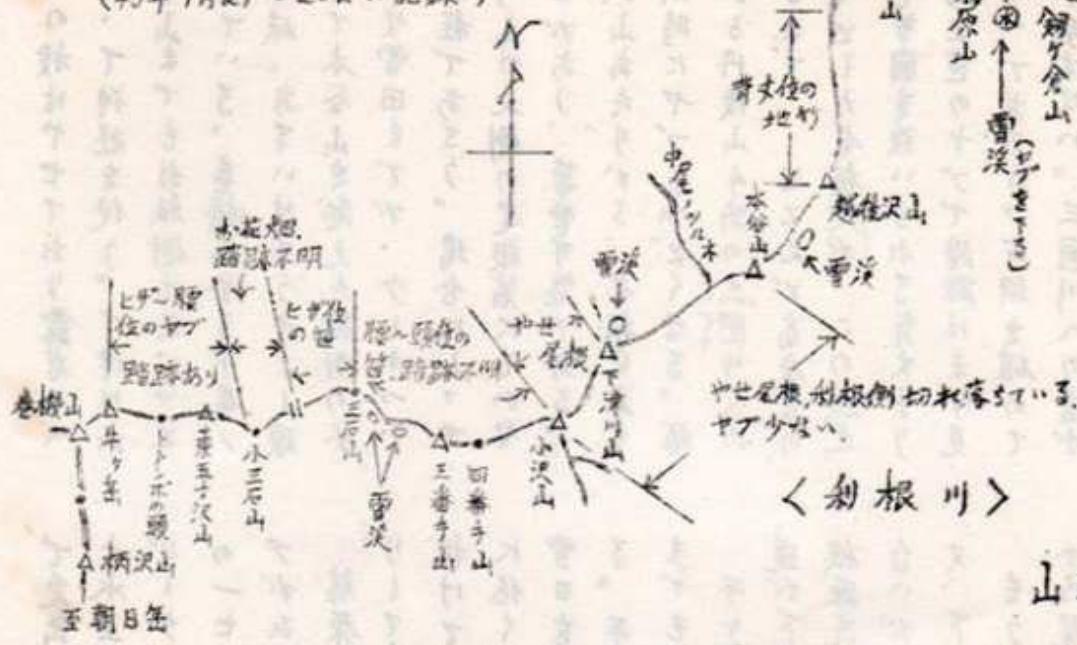
### 〈タイム〉

滝谷出合	9.00
2517mピーク	15.30
南岳	16.00
北穂高岳	20.50

# 白毛内一巻機山

## 大水上一平ヶ岳縦走

(43年7月21~26日の記録)



## 利根川

### 記序昌彦山

登山ブームの波は、本当の山好きな人間をより辺鄙な地域へ導いてやる一因を持っていますように思われる。そのような蔵山には、岩と雪のコントラストといったようなら抜けた美しさはない。その代りまだ人間に汚されない、重厚な、いかにも日本の山という自然がある。

このコースもそれを求めたの山行で、高橋の現役を入れたのであるが、既に接続にはある程度の踏跡を作られ、一部では刈払いもなされ、あと数年もすればまた達せられるよう。牛ヶ岳から小三石山まではヤード低く、踏跡も明瞭だが、小三石山でほど直角に左折、ギボン、キスゲ等のお花畠の急斜面を永松乗越へ下る所は、ガスの時々どなりにくいかも知れぬ。

さるに三石山から三番手山、四番手山辺は背丈より高い笹ヤードで、足元のかすかな踏跡を失わぬよう注意と勘が必要だ。

「こまでも利根側は切れていて足元に注意が必要だが、小沢岳から下

## 銀山湖



## 利根川

### 記序昌彦山

登山ブームの波は、本当の山好きな人間をより辺鄙な地域へ導いていますように思われる。そのような蔵山には、岩と雪のコントラストといつた

当分残されるであろうし、猫の額のような岩場のゲレンデが山であるよう錯覚に陥つてしまふ人達も、たまにはこういう地域にも足を入れて、山を広く知つてもらいたいと思いつつ簡単に紹介する次第である。

白毛内から巻機山まではほとんど問題ない・重装備なし、か一日目に朝日岳で幕営すれば、翌日は巻機山頂の雪原へかなり遅くまで残る

津川山への縁はやせており露岩のへ

すりもあつて神經を使う。下津川山から本谷山までも利根側は又バツと切札落ちていった。巻橋山から中尾ノシル木分岐、あるいはもうすこし頃

張りまして本谷山を越えた鞍部の木  
せり大きな雪田までが、少しきつ  
が一日行程である。場合によつて  
は下津川山の北側の尾根筋にもかな  
りの雪田があり、幕營可能である。  
越後沢山あたりも、尾根は広く  
なるが同時にヤブもひどくなる。越  
後沢山から丹後山手前の三国川さくごうへの  
道に出了まで、ほんと高度差の  
せい坦々とした尾根だが、この縦走  
路中最も苦労を強いられた背丈より  
高い地竹と笠のヤブで踏跡はまず見  
つからないであろう。方向を確めて  
見える所まで出ればもうしめ大もの  
残雪があり、よい幕營地もある。

で免糸から采る明瞭な道に出合う。

大水上山から次の一七〇〇メートル  
ピークまでは立派な道があるが、次  
の一七〇〇メートルピークまではヤ  
ブがひどい。

入へでないりて、様子は分らぬ。逆コースの場合、塵、糞から平引出来では楽な一日行程、水長次出合から平ケ糞未ではややさつハ一日行程である。

# 北岳バントレス オ四尾根

山 沢 典 子 記

九月十五日、四時起床。夜半頃はあんなに星が輝き月あまりおひかへたのに、もうバントレス周辺は黒いガスに包まれてゐる。

B.C.、五時四十分出發。二股よりAがリードに入る。浮き石が大分多い。この頃より小雨が降り出す。

生まれて初めての岩の本番である。ここに来までは不安で不安でしかたがねがつたが、もう、ここまで来たからには自信を持つて、そして吉野さんを信頼してついていかねばならぬ。

先行ペーティが第一コル辺りに行つたのを見させて吉野さんトップで登攀開始。人時二十分、先行ペーティや吉野さんの登り方を吸い入る様に見つめる。テラスに一人でいることが何故かうれしい。

吉野さんのコールがあり登り始め

る。辺りはガスつているので全然高

度感がない。それが儀調に

一ビック今日支終ええたことが出来た。

吉野さんはそのままトップでザイ

ルをのばしていく。いよいよオ四尾

根の根元部第二コルを越してある。

ハーケンが三本打ち込まれていて、

すぐ隣りの中央稜よりガスの中央

金属音が聞こえる。アブミを使用し

てコルを越えようとしたが、吉野さ

んに言われた通りのカラビナにセフ

トしながらたので、後で回収するの

に大分苦労してしまった。どうにか

コルを越えることが出来、ナイフリ

ツジと続く。これキリ一〇メートル

位のアツバサイレーンである。雨にぬ

れて重くなつたザイルにしがみつきながらアツバサイレンする。

かぶり気味の岩縁を越し、三回ツ

千疊リードをコンテニアスで登

攀終了であった。十一時三十五分。

その後トントンと雨がやめ、ガスが晴け

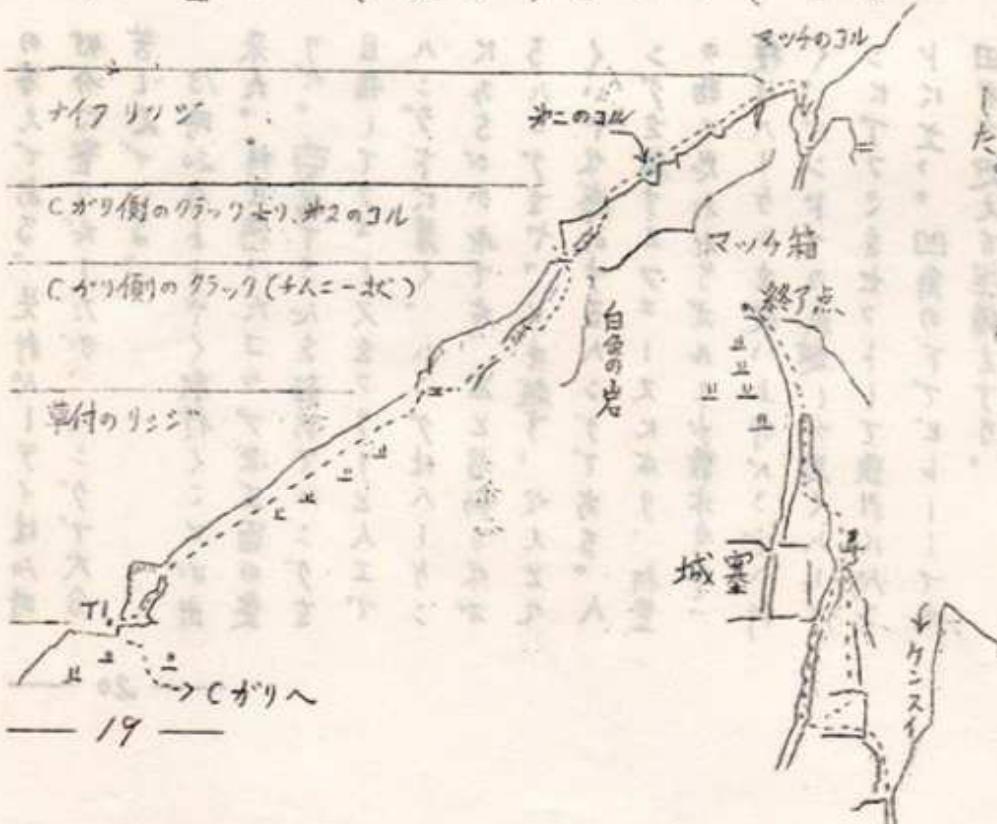
前方に立ち向かう。鳳凰三山や甲斐駒ヶ岳に雲海が流れていく。

帰路、振り返って見たバントレス

は、秋の陽射の中で走りしくてび

え立ち、さすが私を興奮させるので

いた。



「谷川岳一、倉沢

中央棧道コップ状岩壁(緑ルート)

吉野武記

S58年10月5日

付の壁まノビツチ伸す。  
2ビット、凹角からハニグ意味の  
チムニト登り、カン木でビトーリ  
て木田君を迎える。

3ビット、木田君トツブテ草付キ  
ヘMeny 吉野オ・木田清  
リブエースに移りザイルはケン／＼  
今年、四度目のコップへの挑戦で  
ある。いままで雨で行動が出来ず  
に一番の列車で降つた恩いく、今回  
には中央棧道コップ状岩壁正面へ  
の連続を目指して土合駅に降りた。

待合室にて一服後、一人分出合に向う。出合で木筒に水を入れ、幽  
次に行く吉田、長谷川國君に送られ  
て中央棧道に向う。ライトを棘りにヒ  
ヨンゲリの滝を起きてテールリフジ  
ヘ2回の下降で下る。(約10m)下  
降すコップの広場にノペーティのい  
る。ウイクデータなどの静かな谷川岳であ  
る。

中央棧道部で朝食をとり、6時50

分登攀開始。ザイルを結ばず木カン  
テラスまで行くが悪く、テラ  
スでザイルを結ぶ木田君トツブで草  
木とたすねると、緑ルートへ登る。

の答えである。先行ペーティは10時  
45分に登りだしたが、ハングで大分  
苦しんでいる。

13時20分ようやく取付くことが出

来た。精に待つたコップ状正面の登  
りだ。興奮する心を静めてハングを  
目標としてエースをフリード人工で  
ハング下に着く。ハングはハーケン  
にみちびかれて左、左と移動しながら  
ハングをやゝと乗り越す。なんどぬ  
くいやな感のするハングである。人  
ニアを越すとエースに成り、初登  
の物と思われたオルトが數本有り、  
後はハーケンを使い上部バンドへ行  
く。バンドへの乗り越しが悪くハーケ  
ンドアブミをセフトして強引にバン  
ドに立つ。凹角の下でピラーして木  
田君を迎える準備をする。

先行ペーティは見えなく我々二人  
だけの一人倉沢という感へだ。  
ピラー点からは白毛内手の後方に  
星羅の山々が良く見える。もう、3  
時30分をすぎて今日中に土合に着く

事が出来うかと思ひ本がる確保する。  
下より赤のサイルを上げてくれた  
」の声で、「今どこだ」と聞くとハン  
グだそうだ。又、まわりは静まり了  
びの音だけが時々聞えそくりいで  
ある。しばらくして「ヘンダを愈え  
た」との声が少かり木田君の姿が見  
えてきたので「ガンドレー」と一言  
を送る。もう白毛門はボヤーと見え  
見えただけだ。

ルンゼに入る。岩を手でねじてまわして、いたらハーケンがさあつたので、そのハーケンにてビレーして木田君を這える。

掛けて木田君を待つ。

6. ピッヂ。木田君トップでザイル  
を40m伸したが、ピレー点がなくラ  
ストが数段登り、又、トップが数段  
登る。ザイルには一つのカラビナも  
掛ってはしない。スリップには全神経  
をつかう。ルンゼをつめると雨側が

今回の登攀により反省すること多く思ふ。

スピツチ：太田君が凹角へ入る。  
凹角は上部で一度アブミを使用する  
だけでブリード凹角をすぐそそぎ付  
となりザイルも良く伸びる。

3ビッチ。草付と泥に着せし  
みだがちぬれ大草付とスラブを直上  
する。

ナヒツチ。暗く城り、干杯を持ち  
おなたようにカスガマアリキつん  
で、又加位先のトツブの姿も見えぬ  
くなり声を出しあつてはげまし萬う  
草付はれで、て悪、

立木山一、一九〇



# 「浅草岳・守内山」

S 春年 4月 26・28日 (一単独)

山縣昌彦記

真青な空と白い雪被とのコントラスト、雪融けの水辺に首を出した黄緑のフキノトウ、春山の魅力は松の木を攀り立て、又一人でザックとスキー担いで出かけた次第である。

夜行は歎遠して土匪の午後出登、小出駅から今どき珍らしい蒸気キヤニ車でゴットン／＼と只見線に入ると、さすがは日本有数の豪雪地帯、沿線はまだ雪の世界であった。

それでも今年は例年になく雪の少ない年のことで、いつもなら終点の大白川駅から五味沢まで、途中雪崩のため不通になる平石川沿いの道も今年は除雪され、五味沢の音松荘の車がたまたま大白川に来ていたのに便乗、夜道を2時間余りも歩く苦労を省け、最奥の五味沢部落へ家は久軒)まで運ばれる。

(雪の多い年は、大白川新田の少し先で、谷沿いの雪崩を避けて左手の小尾根の鉄塔を目指して登り、尾根を越えて大白に降りる)

音松荘の圍炉裏にあたりながら、熱汗をこな走になる。(未泊り350円)

翌朝5時、スキーカーを組んで出発。ムジナ沢に入る。(ムジナ沢に入った道を少し分りにくく)沢の下部は所々雪が割れて水流が出ていて、沢筋の右手斜面はトラバース感味に登る。5万分の1地図に岩記号があるが、実際にはそれ程のものではな

く(右岸上部に見える)、そこを通じて間もなく前面が大きく割れた崖に出る。右手を捲く。朝のうち気になつていた空もいくらか明るくなり、何とかもうそうだ。ふり返ると

K沢をへてから、左手の台地状の斜面を登りへこの辺はどこでも登れる)、いさかかべてせがう嘉平ヨボツチのピークに出る。前方に浅草岳から伸びる早坂尾根が緩く長く続き、帰路の滑降を樂しみに、緩い雪被をあとひと息がんばって前矢を越え、最後に小さな鳥居をくぐって浅草岳山頂に立つ。まだ10時前、ますますのペースである。

山頂(只見川以西では最高峰)からは鬼ヶ面東面の黒々とした岩壁が眺められた。会の若い人達の好むる壁である。

東南方向には田子倉湖が、ほんやりすんで魚沼三山から下ヶ岳、そして奥只見の山々が白く連なる。未丈、毛藻、一丈ばかりの山がある。有難いことだ。

さて、ようやくここで厄介なスキーライドはあと一ヶ所雪が割れているだけで、あとは次第をつめ、まもなく出合う二俣は左をとる。適当尾根の渓谷に移る。

無雪期にはヤブで通れるこの尾根

も、今は一面に深い雪でおあやた長

大なスロープ、どんな古典的なスタイルで滑ろうと、見ている者はいい

い。右に左に快速なショープールを画

きながら、守門を正面に見て滑降ま

た滑降。その内ブナの林間滑降に入る。

左下は崖で切れていて、崖根

通りに左に回りこむようにななり下

を目標に下る。開けた雪原の中、

右沢に面した營林署小屋に出る（こ

の下りはカスでもあると分りにくいい）。

小屋の人は熊狩りにでも出かけ

たのであるうか、誰もいない。

昼の行動食を食べてから、右沢沿

いの道へもさるん雪に埋もれて、三

ヶ所のコンクリート橋のほかは道と

は分らぬい状態）を滑降することね

分位で五味沢から来る林道に出る。

五味沢の音松荘に戻った頃、今ま

でもつていた空きどうく泣き始め

、雪の間に顔を出した水溜りに、雨

足の波紋を作り始めた。

できれば明日はこの五味沢かる直接北西へ向かう尾根をつめて、鳥帽子、守門へとバリエーションルートを取ると思つていたのだが、二の

天気ではと諦め、タ方まで松荘の車に便乗して大白川へ戻り、大丸屋と言ふ旅館？に移動する。

古い本には旅館として載つてゐるが、案内をとうと小母さんが現れ、旅館はもう止めたとのこと。でもまあ一お上りせさい、と快よく一部屋空けてくれた。

ここ大白川は戸数二十戸位あるうか。大丸屋の裏手にかなり新しい小学校が建つてゐるが、ここも過原現象か生徒が減り、向もなく廃校となる。その後、新しく四色刷りの出でていること（大白川）・大雪沢に継ぐ沢の左岸の（進んだところが、ノ町間近く歩いた所で、道はすっぱり崩れ落ち、どう探しても行けない。止むを得ずまた半分程戻り、コンクリートの橋を渡つて右岸の林道に出で、それま通り登、一ヶ月頃ようやく雪の山中に捨てられたトト木大原用拓部落に出る。開拓部落と言う名の通りの食しげな部落、5と6人の子供達が母親に連れられて、雪道を

引き張ってテレビを映していた。何となく都會文明と山村の差異など入り混つたアンバランスを感じざるを得ない。

一と晩降り続いた雨も朝方一気に止つたが、雪が低い。スキーで林道へ抜けたりはあきらめ、ピッケルとサバゲーで5時半に宿を出立。

橋の手前で右の林道に入る。どこまで5万分の1の地図は全く駄目）。その後、新しく四色刷りの出でていること（大白川）・大雪沢に継ぐ沢の左岸の（進んだところが、ノ町間近く歩いた所で、道はすっぱり崩れ落ち、どう探しても行けない。止むを得ずまた半分程戻り、コンクリートの橋を渡つて右岸の林道に出で、それま通り登、一ヶ月頃ようやく雪の山中に捨てられたトト木大原用拓部落に出る。開拓部落と言う名の通りの食しげな部落、5と6人の子供達が母親に連れられて、雪道を

下の学校へと下って行つた。もちろん田も畠も一面に雪の下である。苦しい生活がしのばれる。

部落から右へ回り込むようにして

上祝沢の雪原に出る。ただ、広い雪

原を、所々薄くなつた雪の下から聞こえる水流の音に注意しながらつめて行くと、荒涼とした伐採地に出る。一面のガスアルートは一向に分らない。一服して待つてもガスは動かない。いくつもある支尾根はヤブがない。出ていりうて、適當な雪沃を少し登つてみたが、ガスの中から突然プロツクが落ちて来たりして、單独行の細や、再び下の台地に下つて天候の回復を待つ。

実は、晴登・雨釣と釣道具も背負つて来たので、よほど諒めて釣りでもしようかと思つていた所、午時頃ようやくガスが上り始め、正面意外に近く尾根筋が見えて来た。こうなつては登らぬあけにはいかぬ。正面に滝を落としている岩壁の左手の雪渓

をつめることにした。上部はかなり急、ピッケルとキックステップで登る途中で3回プロツク崩壊に会い、何個かは足許をかすめて落ちて行った。

ようやく支尾根に立ち、雪庇の根本とヤブとの境目を右に慎重に越つて小エボシの上に出ると、青雲岳、大岳から西へ延びる長大な雪の尾根が目前に横たわつてゐる。あとは広い尾根の縦い登りで、守内山頂まで大したことはない。すでに空は真青に晴れ上がり、佐渡ヶ島まではかすん見えぬが、越後・奥只見の山々は一望のものにある。

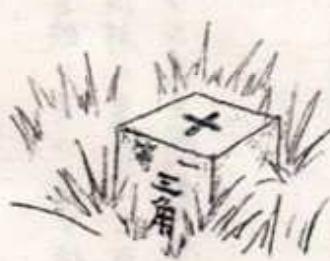
大岳からのスキーパーク滑降はさすが快適であるが、今回は致しかねない。帰路は登りのいやな雪渓を避けて、大原へと続く少しやせた支尾根を慎重に下つた。

来年はスキーを組ぎ、上げて向こうへ抜けてみよう。キビタキ、ウゲイスの鳴き声、雪融水のせせらぎの音

を聞きながら、フキノトウ、ショウジョウ、バカマの間の路吉大白川へ下つたのである。

### 〈コース・タイム〉

左岸を行き 40~50分ロス 橋に戻り渡る。	大原開拓 部落	上祝沢上部	小エボシ	守内山	大原	渓谷	平坂尾根	右沢岩林界 小屋	大白川林道	五味沢	26日 大白川	11.10	9.40	26日 大白川	11.10	9.40	27日 五味沢	12.15	13.00	27日 五味沢	12.15	13.00	ムジナ沢	右岸岩壁	滝	二俣	促	カヘヨボシ	5.30	19.00	19.35	5.00	5.45	6.00	6.45	7.30	7.50	8.00	9.10



谷川岳

—幽の沢中央壁正面フエイス—

卷之三

アンバー 吉野 設一 武

吉野  
吉田毅一  
木田清

吉田毅一(記)

明かるくなつてきた出合から、スザンタに切れているカール・ボーデンの雪渓を右手より捲いて、右フェイス取付点までの小リツジを登る。空を覆つていた雨雲もその頃、強風に吹き飛ばされて陽光が中央壁を射する。すばらしい登攀を約束してくれそうである。たかぶつてくる昇奮を小リツジの快適なスラブ登攀を楽しむ事に転換して取付向う。

正面フェイスの一般的に登られてはいる、いわゆるブルートからの取付点は小リツジの左手にある濡れたいやなクラックを登り、草付バンドを左上して豆腐岩の右にある草付の下である。ここには、豆腐岩に縋くべ

ンドがある。手早くアンザイレンして、いよいよ一ピッチである。

一ピッチ目は、このバンドより草付の中を右手より回り込んで、豆腐岩右にあるスラブの上部までである。草付の中はズーハーのスタンスが踏んであり、容易である。三十メートル

二。ピッテ目は、左ヘセメートル軽  
トラバースし、凹状部を直上して左  
手のフェイスに出てなおも直上する  
四十メートルにつはいにりびる。  
このピッテはホールドも細かく、登  
攀を開始して間もないのに体がギゴ  
ちない。又、ビレー・シンも一本ある  
だけなので緊張せらる。着いた  
所は、外傾したテラスが有りここで  
先行ペーティを待つ。時々落石があ  
るが、上部がハンングしているのでダ  
イレクトに下のカール・ホールデンま  
で落ちて行く。しかし、ある落石の  
なんともいえない反音はいつ聞いて  
もいやなものである。

三。ピッテ目、このピッケにサハングがあり、このルートの核部と聞く。細かいホールドをひろってアーチを直上する。十五メートル程度直上した後、右手にあるハングの張出しの少ない所に向う。ハング下の数メートルは、ホールドが非常に細かく極度の緊張をいられる。登攀のクライマソックスだ。数ミリのミスが大事故を招く。この裏場でないと本してぐるし、ハング下の残置ホールドに着いた時はホツとした。ハングまで手元にしてはいけないとかかっていいても、このときの状態からすれば何よりもぐるすホールドだ。たのだから、――、ハングは張出しが少なくガンナリしたホールドがある。でフリーで楽に越える。ハングよりフェイスを快適に登つて、安定したテラスへ出る。四十メートルギリギリである。

たのだから……。ハングは張出しが少なくガソナリしたホールドがあるりでフリーで楽に越える。ハングよりフェイスを快適に登つて、安定したテラスへ出る。四十メートルギリギリである。

四ヒツ目は、テラスよりガブリ意味のフェイスを登る。道幅で、し

かも濡れているので悪く感じること  
ある。十五メートル程度直上して  
、草付のハンゲをだましながら乗、  
越し、正面ルンゼの中央部まで水平  
にトラバースする。そこには、安定  
した棚があり、寒場も終えたので、  
煙草に火をつけてしばしの憩いを楽し  
しむ。

正面ルンゼの中にいる。傾斜はグ  
ンと落ちて、草付まじりのあまり見  
えられないところである。

五。ピッヂ目は、ルンゼの中を真す  
べた四十メートルハーパーにのぼる。  
どこを登っても困難なところはない  
。しかし草付特有の悪さがあるの  
で慎重に登る。次の六ピッヂ目モル  
ンゼの中を四十メートル直上である  
。ラストが六ピッヂ目を登り出すと  
同時にトソブは次の七ピッヂ目をか  
せぐ。セピッヂ目も又、ルンゼの草  
付草を直上である。四十メートル。  
ハピック目、草付を直上すると、  
ハングに頭をあさえられるのでヘン

グの下を右へトラバースしてカンテ  
に向う。トラバースから、カンテに  
出るまでが數メートルであるが、木  
ールドが細かく濡れているのでいや  
なところだ。カンテに出ると立派な  
テラスがあつたが、ザイルがまだの  
びると言うので、カンテを回り込んで  
右フェイスからきてリルンゼの  
中にに入る。このルンゼもまた、正面  
ルンゼと同じ程度のものでしかない  
。ここからは、うまい具合にV字岩  
稜の全貌が見渡せる。V字岩稜右ル  
ートに入っている牧野・山崎ペーテ  
イはどうしたものやらと、キヨロキ  
ヨロ見わたすと、下の方で牧野さん  
のコールが聞こえてくる。アッ、い  
たいた。まだやつと三ピッヂ目に入  
ったところだ。V字の右ルートには  
相当数のペーティが入っており、か  
なりの時間待ちをやうされたらしい  
。一ノ倉の南稜並みの混雑さである  
。もはや休日の谷川岳では、静かな  
、走まな春攀き楽しむ事は幽の次

でさえ攀じられてしまつた感がある。  
九。ピッヂ目、ルンゼを三十メート  
ル程詰めて、右手のナッシュ芋に入  
る。このまま直上しても二十メート  
ル程のもうそろなフェイスがあるだ  
けなので、あえて登ることもあるだ  
と言ふ事で、後はブッシュニギをさき  
あけて行く。飛び出した所は中央壁  
の頭右下にあるテラスである。中央  
壁の頭まで三十メートル程、コンテ  
ニアスで登る。攀攀終了。

攀攀が無事終了してしまふと、期  
待したほどでもなかつたなアーとい  
う気持ち安堵感が入り混じつて、け  
だるかつた。見上げる空は緑碧だ。

タイ	ム	>
合		4.00
幽	次出合	5.00
取付	点	6.50
攀攀	終了	11.05
土	合	16.00

# 「ある登攀手」

吉田 設一 (記)

前のヒツナから降り出した雨が、岩を濡らし、寒さを増している核部の草付クラックに捲いているガスをつき破 ようにしてトップは取付いて行く。

ガスは僕達をふりはらうかのようだ、上からも、下からも、横からも、そして後からもおそいかつてくる。貫けてやるものかと、スタンスをかため、ザイルをにぎり直してジッフェルする。すると、ガスは僕達の視界をさえぎることに専念するかのように、いよいよ厚くなつてゆく。

ワラツのや間の会員二人と一緒に行くことになつて、いたが、もう一人小林君を入れて二ペーティで行くことになつた。いつも登攀待ちで混むので、夕方早く出発する。通勤列車がのぞ熊谷を過ぎると、座席がガラガラになり楽に座れた。水上に二時四十分に着く。タクシーで登山センターまで行く。登山センターで登山届を済ましてから、休憩所で三時間程休眠して二時半頃出発する。

赤いザイルがジリくとのびてゆくだけだ、大。

(谷川岳の沢中央壁)

544 6/9

左フェイスにて)

## 八谷川岳

一一一倉沢四ルンゼー

544年8月30日

入メンバー

山崎定治  
小林一郎

山崎定治(記)

朝が早いので人が少ない。日が明るくなり始める頃、中央棧テールリッジを登る。中央棧基部で衝立岩の吉野ペーティと声を上げて呼び合う。エボン奥壁下のバンドを落石に注意しながら通。南棧テラスは相変わらず満員だ。本谷バンドに降りてから登攀用具を取出す。

Fはニルンゼ及び六ルンゼの合流点にあり、Fよりアンザイレンをする。正面より登り、岩が乾いているのでフリクツショーンが効いて登りやすい。

Fノは高度感はないが上部がハングしているのできびしい。左よりトラベース意味に登り、残置ハーケンのつて、夕方早く出発する。通勤列車がのぞ熊谷を過ぎると、座席がガラガラになり楽に座れた。水上に二時四十分に着く。タクシーで登山センターまで行く。登山センターで休憩所で三時間程休眠して二時半頃出発する。

Fさんは右から木ールドの豊富なり

ラッソに足を入れながらフリクショ  
ンを効かして難なく登る。

F3はナムニー状のチヨンフリストンを理した港だ。左は傾斜があり木彫ードが小さく滑りやすい。残置ハーケンの所まで登り、ハーケンに手を掛けようとした時に滑ってしまう。幸い高度一メートルなので人でもなれかつた。ナムニー状を登る。下部は狭くかろうじてバックアンドニード登り、ナヨックストーンは抱きつかえようにして這は上る。さらちにチムニー状を登るが、上部は狭くなりハンゲ氣味となる。右に抜け出るが、ハンゲ気味なのでバランスが不安定である。左に残置ハーケンがあるたびでオラビナを掛け、左へ回り込む。外傾した木彫ードを頬りに横壁に登り上に出る。一諸に来たワラジの仲間ペーテイを待ちながら軽い食事を取る。下は相當に詰まっているようだ。

登る。上部は草付まじりで、さるに上はハング気味である。ソソヘルも慎重に成り、堅張した岩場を超越す。左の草付まじりの傾斜のゆるい壁を登る。本流と遠ざかりルートを間違つてしまつたので右へ大きくトラバースする。

F5. 千ムニー状のもういい岩を、先行ドーテイの落石に注意しながら登る。上部は濡れていてヌルヌルした岩苔が付いていて気持ち悪い。手足を緊張しようにして慎重に登る。

F5を過ぎると、ガリ状の明るく開けた二俣に出る。右から草付に入り、踏跡をたどつて明るく広いテラスで後続のワラジの仲間ドーテイを待つ。

昼食を取る。夏の日射しを受けて眠くなつてしまう。混んでいて二時間程待たされる。草付の急な登りを汗をたらしながら、一ノ倉岳へと向つた。

谷川岳南面

—川棚次遊行本谷下原—

ハメンダーム

山東昌平

山縣昌彥  
(完)

谷川無南面二俣から見ると、草岩から左にタカの巣B・C沢のステップ、その向こうの鞍線にマツカケ岩の奇峰が遠望される。このマツカケ岩を源頭に持つ沢が川棚沢である。

八月下旬、ヒツゴ一沢、タカウ集  
A沢を登つた後、引継ぎ川棚沢に向  
かう。二俣から本谷を遡ること一時  
間足らずで、川棚沢出合に着く。正  
面にいくつもの滝をかけた明るい沢

第1回

出合する小滝が緩くが、岩も硬く問題はない。間もなく小さな右俣を分け、本谷と右俣との間の快適な岩尾根を登り、再び本沢に戻ると間も

なく左側からルンゼが入り、二段の

滑滲、これも問題はない。次が左に

曲ると三十メートル位の大滲に出合

う。緩傾斜のスラブである下部は案

に登つて上段下に達するが、この上

段五メートル位は取り付きがややか

びり気味で、中間の壁を慎重に登り

上のスラブに出る。ここだけザイル

支用いた。

この先はしばらく右側はオーバー

ハングした壁があらかじめさるよう

になり、その地帯を抜けると、再び

明るく、マツカケ岩がぐつと近くに

望まれるようになる。なお、いくつ

かの滲を越して登ると、マツカケ岩

の右手の基部に着く。左方はマツカ

ケ岩、すこし右手はタカの巣(次)

の境界尾根の小さな岩躰、その間の

ゆるい草原地帯を十五分位登ると、

待望の縦縫に出る。川棚沢の頭はす

ぐ左手、右は沼宮に緩く縦縫、正面

は赤谷川をへだてて大障子から万太郎と続く国境縦縫が手にとるようだ

望まれる。

時間も早いので予定通り本谷を下

降することにして、川棚沢の頭に登る

。竿を主としたヤブの中にかすかな

踏跡がしばらくは続いていたが、川

棚沢の頭からはその踏跡も消え、石

楠花、ハイ松等灌木まじりのひどい

ヤブとなる。なるべく左寄りに、上

のナメ次、奥のナメ次源頭の崖沿

いにヤブをこぐ。前日までの疲れが

急に出て来たようを感じられ、かね

りビテル。縦縫は次第に低く左に曲

りこむ。小出保山との最終鞍部から

本谷へ下るつもりであったが、この

ヤブこぎに由口し、本谷(左俣)と

右俣の中間のヤブの支尾根を目標に

、灌木にぶら下りたり、ターザンの

ような格好で、強引に下降、四十五

合位でようやく右俣の沢肩に降り立

つ。沢身を四十分程下降すると、突然

前方が切れ落ち、四〇五メートル程あるかと思われる大滲の上に出る。本谷の右俣、左俣、それに奥

のナメ次へと思われた」とが合流し

て下の本谷に落下するY字状の滲で、

本谷側は右俣も左俣も直壁で、豈

富は水流が空中に飛沫をあげ、すこ

そ降りられない。止むを得ず左側のヤブをかき分け、奥のナメ

次に入り、立木をピンニアブザイド

ンで滲の下段まで下り、あとは岩伝

いにようやく本谷に下り立つ。下方

に見上げるY字状の滲は見事である。

本谷遍行の場合、左側がルートと

書かれてある本があるが、左側は壁

でルートにはこれまで見られて

いる。

あとは、以前からの宿願の一つを

果たした満足感に浸りながら本谷を下る。

最後に、前面の滲の中川棚沢は

タカの巣の各次より東しめる静かな

滲だとと思う。縦縫も粗岩方面へは明

瞭な踏跡があるが、時間に余裕のないときは中ゴー尾根を下降すればよいであろう。(コースタイムは割愛)

谷川岳

一ノ倉沢衝立岩

S  
44年8月31日

メンバー 吉野 武  
太田 靖

吉野  
武宣

午后九時登山センター着き、登山届を出す。一ノ倉沢出合小屋着十時。  
飯坂後、午前三時三十分に小屋を出る。出合にて朝食と取了り、でも  
、我々は行動食しか持つていなかつて、浦和山岳会の人にいただいた。食  
事後、ゆっくりと中央鞍基部へ向う

途中で当舎の此路さん達と会う  
あたがいに成功を約して先に進む、  
基部着四時三十分。五時にダイレ  
クトカンテに向ひ、トランバースに入  
り、正面雲梯ルートのアンザイレン  
テラスよりケンスイ棧、アンザイレ  
ンとして一ピッチでボサテラス着、六  
時。先行ペーティ有る。

スより右に回り、直上するボルトケ  
ンがあまりきいていはず、いやらしい  
登りであつた。ピナクルテラスに着  
いたが、先行ペーテイがいる熱にテ  
ストは登れず、一時間三十分も待た  
された。

北岳バットレス

— IDガリーリー壁口ーテル・ラテ  
— S 44年9月21日

人名ノート

吉野式(字)

ピナクルテラスよりオニンシゲを目指して高度をかせぐ。オニハングは右にまくようにして、ハーケン、ボルトにアブミをゼットしてボルトテラスへ。ハングの出口のハーケンもグラブしていふが、たましやから使用してボルトテラスに立ち、テストを迎える。

オルトアスより右にヨリセノ  
一トル位直上してから右方にトラベ  
ースする。トラバースはフリーで  
人工のミツクスでいつもの時と同じ  
だが、やはり感のする所だつた。九時  
に着いて登攀終了。十二時三十分。  
下山は一番近い北横を二回のアツ  
ブザイレンで下降す。

失行バー・テイがアンザイレンする事にザイルを出して いたが、我々は時間を有効に使ふ為とザイルなしでも登れうたので、ノーザイルで失行する。ホールドはせいか、岩はガソナリして いる。滝の上で小休止後、取付点に向う。ロー・テル・プラ・テイーは一番左のルートであり、取付点付近がハングして いるのですぐにわかる。取付よりオ四星根を見ると大人分人が多い。マット箱のユルに当会

の牧野・木村ペーテイがいるので、  
コールを掛ける。

一ピツチ・スラブのトラバースを  
二メートル直上、又、右ヘトラバー  
スしてクラックを直上するが、上に  
登るにしたがハクラックが狭まくな  
り強引に登る。

二ピツチ・スラブをハーケンをス  
タンスにして直上して、左ヘトラバ  
ースに入る必要、五メートル位が。  
三ピツチ・右上に登るがスタンス  
よりハーケンの間が遠く、二二三回  
くりかえして、やとカラビナを掛  
る。

四ピツチ・城塞のテムーを登り  
、登攀終了。

このルートは快速なスラブの登攀  
であった。



### 南会津の山

S44年10月24~26日

人单独✓

山縣昌彦(記)

天高く紅葉の映える秋は、残雪か  
るフキのとうが頭を出す春と同様、  
山夷いのじきうすかさずにはおかな  
い季節である。

勤めの都合で三日連休がとれ、念

願の南会津へ、又も一人でいそく  
と出かけた次第である。七ヶ岳は五  
万仞一地図「糸沢」のほぼ中央、標

高1635.8メートルの毛虫(岩)記号が継  
いた山、荒海山は下方、栃木県との  
県境をなす帝釈山脈中の雄峰1580メー  
トル、いずれも地図には登山道はな  
く、最近前者には沢沿いのルート、  
後者は頂上にロボント観測所が作ら  
れてその道が出来たという。余り知  
らず寂寥い静かな山である。

奥熱河温泉からバスは五十里湖、  
山王峠を経て会津田島まで二時半  
ばかりひた走る。

五十里湖あたりから、どう  
ち向いても山は燃えそばか  
りの赤茶である。

田島から更にバスで針生  
まで入る。みどり屋前と吉  
うバス停の少し手前に七ヶ  
岳入口といふ指導標がある  
。田んぼの間の道はやがて  
黒森川を左下に見る林道と  
なり、林業事務所のバラソ  
クを最終に、紅葉、黄葉の  
山と私だけの世界になる。



道は次第に細くなり、草の茂った徑  
をまおき通ると、やがて左下に黒森  
沢へ下りる徑に出る。沢廟は狭く、  
良い幕営地はないが、沢のわきの狭  
い台地にツエルトを張る。秋の日は  
短かい。晴れていれば十五夜に近い  
月が見えるはずの空は真暗で、星一  
つ見えない。夜中の二時頃、ツエル  
トをうつ雨の音に目を覚まされ、フ  
ライ代りのビニールシートをかぶせ  
て何とかまたせた。

翌朝、山の中腹から上はがスに包  
まれていたが、幸い雨は止んでいた

。荷物をまとめ、沢の転石堆いに遡  
行開始。滑床が多く、滑らかな水流  
にあとから／＼落葉が流されて  
行く。三十分余で、目前に黒森沢の  
大滝が現われる。二三十メートル  
の滝が数段にかかるでいる。岩は濡  
れているが階段状なので登りやすい  
。これを登りきると更にゆるい滑床  
が二二三百メートル続く。笛吹川の  
東次の枝伏部を小さくしたような実

に美しい沢だ。右に、左にと渡りな  
がら登りつめると、鞍部近く(1558  
の少し北)で左寺にヤブの切り開き  
があり、これに入りて少し登れば突  
然尻当たりの強い鞍部に出る。ここ  
に、左セケダ、右高根高原へと書か  
れた指導標がある。霧雨まじりの方  
は強く強い風の中を左へ登れば、間も  
なく石楠花やツツジに囲まれた頂上  
の三角点に着く。会津駒から那須で  
日光まで一望できるはずだが視界は  
きかず残念だ。ここから続くはずの  
岩峰群もはつきりとは見えない。

バスの終点の鉢山社宅で降りた乗  
客は、たちまちその辺の家に消え、  
あとは雨の中を一人、荒海川に沿つ  
て鉢山の奥へと車道を進む。兩岸の  
紅葉は雨に洗われて一段とあざやか  
である。鉢山事務所を過ぎ、トロッ  
コの鐵橋の下をくぐると道は狭く外  
への指導標に従つて、岩壁をまきな  
がら左へ下る。ブナの原生林を過ぎ  
、間もなく平滑沢の源流へと出る(「  
御嶽の字へ入つてひづ沢」)。この沢も  
名前通り滑床の綺くきれいな幽谷で  
ある。約一時間で本流と合流、ここ  
に避難小屋(十人位は泊れる)あり  
、本流の少し上流に平滑港がかかる  
。これを登りきると更にゆるい滑床  
が二二三百メートル続く。笛吹川の  
東次の枝伏部を小さくしたような実

りした道を下れば羽塩の部落へ出る。  
羽塩でハヅ鉢山行きのバスを待つ  
でいるとまた雨が降り出した。今夜  
のビバークを考えうど向うにな  
てくる。

バスの終点の鉢山社宅で降りた乗  
客は、たちまちその辺の家に消え、  
あとは雨の中を一人、荒海川に沿つ  
て鉢山の奥へと車道を進む。兩岸の  
紅葉は雨に洗われて一段とあざやか  
である。鉢山事務所を過ぎ、トロッ  
コの鐵橋の下をくぐると道は狭く外  
への指導標に従つて、岩壁をまきな  
がら左へ下る。ブナの原生林を過ぎ  
、間もなく平滑沢の源流へと出る(「  
御嶽の字へ入つてひづ沢」)。この沢も  
名前通り滑床の綺くきれいな幽谷で  
ある。約一時間で本流と合流、ここ  
に避難小屋(十人位は泊れる)あり  
、本流の少し上流に平滑港がかかる  
。これを登りきると更にゆるい滑床  
が二二三百メートル続く。笛吹川の  
東次の枝伏部を小さくしたような実

かけて尾根とし、ようやく雨をしのぐ一夜の宿を作った。

至羽塩



翌朝、何とか雨は止んでいた。で  
きれば荒海山を越えて栃木県側の入  
山沢を下る予定なので、この天気で  
は駄目かも知れぬと思いつながらも、  
荷物をまとめて出発。ビバーグ地の  
すぐ先で右から入る小沢ルートで  
ある。ちょと上の木の幹に荒海山  
と書いた指導板が打ちつけてある。  
小沢は向もなく伏流となり、ヤブを

切り開いて右に沢をはなれて急登す  
る径が別れる。沢を左下にしてこの  
径を登りつめると尾根に出る。地図  
で荒海山から北へ下る尾根の1249.5メー  
トルのピークの南の地点らしい。こ  
の尾根についた踏跡を左にと  
ると、間もなく窓のヤブと倒  
木で踏跡はしばしば分らなくな  
なる。ともすれば枯葉に埋も  
れて右下へ下りがちになるが  
、縦線をはずさぬようヤブ  
をこぎながら進むと、また踏  
跡が出てくる。小さなピークをいく  
つか越えて樹林帯の中の徑を辿るよ

、やがてツガや石楠花が現われ、最  
後の急登で樹林帯を抜けると尽当たり  
が強くなり、無人観測所の建物に  
出る。三角点のある頂上は、そこか  
らヤブをひどこぎした上である。途  
中から降り出した雨でズボンはびつ  
しょり、今日も視界はゼロで、足に  
吹かれて寒い。入山沢へ下るルート  
せど全く見当がつかず、いさぎよく

往路を引き返すこととした。下りでは落葉にかくされた木の根に滑り、数回見事にひっくり返り、腰の骨を打った。

晴れるに越したことはないが、私  
にとっては雨の山でも良い。まして  
人、子一人会わぬい近境の秋の山。  
雨に濡れた紅葉がはるかと散り、  
落葉は踵まで靴を埋める。徑は沢に  
始まり、そしてヤブの中に消えてしま  
た現あれど、俗化した山に失われ  
た日本の山の良さがここには残されて  
いる。印象に残る山旅の一頁であ  
つた。

（編）紙面の都合にてコースタイムを  
割愛させていただきました。七  
ヶ山、荒海山に折かれるまで、七  
時半山縣氏に向合せください。  
時半山縣氏に向合せください。

# ヨーロッパ日記

一九六九年六月くへ月

## 奥園義輝記

ことにした。

海外の山に登る。これは私の十代の若い頃からの夢であり、それを今年やっと実現することができた。それも妻を伴つての、ヨーロッパの山めぐり、という形で。

さすがに、ヨーロッパまで行くとなれば、まずは先立つものが必要であり、それでも二人分となれば、尋常一様な方法では、作り出すことはできない。かといって、我々ごときに、気前良く金を出してくれるようなお人良しもないし。それまで私は、棟高の山小屋でアルバイトをやり、なんとか一人分の費用はできていたが、妻の分がなんとしても、どこからも出てきそうになり。そこで奮起一発、今までに身についた技術が私にはあり、それで請負い業をやる

おかげで体の方はいい可減かタガキてしまつたが、費用の方は予想以上にくまく作ることができた。まずはオーライを突破することができた。

金を作ることに比べれば、渡航手続などは楽なものである。実際行けるといふことになれば、こういった手続きは、楽しい苦勞ということになる。それでも、東京交通公社本社まで、何回足を運んだことだろう。

県庁へパスポートを受取りに行つた日は、ひどい雪の日であつた。このパスポートは、今も記念に家に置いてある。

出発前までに、色々な出来事があつたが、それでも、無事六月十日、横浜港をソ連船ハロフスク号で出発することができた。

出発までの出来事は、後の茶飲話にでも残しておくことにして、こことは、旅行中のことを、簡単に日記調に述べてゆくことにする。

八六月十日

横浜港から、ソ連船ハロフスク号にて出発。見送りに、会員の吉田君と木村さんが来ててくれた。同船に、同じヨーロッパの山を目指して行く人達が他に五人、関西の中谷氏と辰野氏ペーティ。碧縫山岳会の二人。丁ECCの木村氏である。奇しくも、彼等五名は、今年のアイガーノ壁登攀に成功し、その内の木村氏、碧縫の二人は、日本人でも数少ないヨーロッパ三大北壁の登攀者となつたのである。

出発はさすがに悲しいようね、うれしいような複雑な心境。

八六月十一日

波が高く、よく揺れる。いよいよ日本海に入り、本当に日本とも当分の間お別れである。東京湾を遠つて、日本海の水はすごくきれいである

人六月十二日

いよいよ始めての外団。まずはソ

列車は、四人室の個室。同室の人達も、色々と個性のある人ばかりで大変面白い。

見え始め、時間通り午後四時、ナホトカ港に着く。船上でバスボートの検査があり、体ひとつで上陸。船で

たてた三田田の前に、もうこんな遠  
つた国があることに、改めて  
驚く。回り皆、いわゆる紅毛人で  
ある。建物、言葉、習慣、全て違つ  
ていす國へ來た。

人六月十三日＼  
窓から見える景色は、我々日本人には、見なれないものばかり。ただただ広いばかりの平原。どこまでも続く白樺林。泥沼を思わせる開拓部落。一言に言えば、荒涼としているのである。

九時間乗リつぱなしの末、やつゞ  
モスクワ着。午後七時。太陽はまだ  
高いところにある。バスに乗り、モ  
スクワ市内のウクライナホテルへ行  
き投宿。何分疲れだ。暗くなつたの  
が十時過ぎ。

八月十四日  
今日は一日、モスクワ見学。日本語の話せぬガイドが付き、特別バスで案内してくれる。まずクレムリン

特別仕立のバスへひどくきたない  
）で鉄道駅へ。駅で二時間程、宿があ  
あつたので、二人で近くの丘に登っ  
てみる。丘の上からは、ナホトカの  
港が一望の内で、ひどくのどかな眺  
めである。駅への帰りに、裏の方の  
町に入つてみる。これ又ひどくきた  
ない所で、日本のドヤ街を思わせる  
ような所だ。子供達が走り寄つてきて、  
ジエスチアで何かくれとせがむ  
ので、チューインガムをくれてやつ

卷之三

たくソ連という国がわからなくなつた。

八月十五日✓

モスクワを出るのは夜なので、又今日も市内見学である。博覧会々場へ行く。ソ連色の濃い見せ物が多く、私には見ていても、ただ疲れるだけである。

午後は一人で、モスクワ河のほとりを歩く。小供達が、きたない水に入つて泳いでいる。夜十一時、汽車はモスクワを離れて、一路ウイーンへ。

八月十六日✓

早朝ミンスクを通過。昼前にブレスト着。ここで二時間程時間があるので、残ったループルをドルに換えてゆく。

タ方。オーランドのフルジヤワ着。

ソ連に比べると、ずっと回りの風景も明るくなつてくる。ちよつと駅

の外に出て、近くの公園まで行つて升る。

八月十七日✓

真夜中に何回もタタキ起こされ、まったく不愉快。午前七時にウイーン南駅に到着。ウイーンは、今近に通ってきたところが、あまりにも物がなさすぎたのか、そしてきたなかつたのか、ウイーンがなんとも素晴らしい町に見えた。

ベニス行の列車は、夜の十時だから、昼間、ウイーンの町を見物しておく。

ウイーンまでは、一諸に横浜を出た人達がいっぱいいたのだが、これからは我々だけである。一口ローマまで、織の勉強に行くという人がいて、同じ汽車に乗る。

八月十八日✓

午前十時ベニス着。まずは金がいるので、銀行へ行つてみたら、日本

円は駄目だという。頭にきたが仕方がないので、トテベラースチエソク（注）旅費者用小切手のこと）で交換する。

カラルゾ行の電車には、まだ時間があるので、ベニス市内を見物して回る。面白い町である。オーブが豊富で安い。鞄ハガキや、子供の頃の絵本で見た町に今自分がいるのだと思うと、心が浮き揚ぎする。

午後三時半頃の電車で、カラルゾへ向う。途中二回の乗り換えがあり、それもベニスから一諸に乗つた娘さんが助けてくれ、無事午後七時カラルゾ着。小さな駅の案内所で、接してもらったホテルに泊る。小さなホテルで、名前は「ビビオ」。

八月十九日✓

ひどい雨の中をバスに乗り、コルナ・グンペツツオへ向う。雲の切れ間に見える岩壁は、確かに自分は今ドロミテにいることを教えてくれ

る。寒風である。

雨のコルチナは静かで、そこで二時間経過つて、ミズリナ行のバスに来る。パマガニヨンの岩壁を過ぎると、すぐにクリスマスの大キな壁が目前にせまる。右にソラビスを眺め、約三十分でミズリナ着。小さな湖がある。先に着いていた碧綠山岱会の人々手伝つてもらい、キヤンプ場まで荷を運ぶ。

小十人キヤンプ場に我々のテントも加えて合計三張。いつも静かである。雨も上りドライ・ナンネが見える。すぐ右手上方には、カティーニの岩峰群が仰げる。良い所である。

八六月二十日✓

食糧買い出しに行く。ミズリナのバス停で、バスを持つが、いつこうに来そうになないので、ヒツナハイクにする。

三十分程でやゝ一台止ってくれた。コルチナまで、まづ夫々素的な

雨のコルチナは静かで、そこで二時間経過つて、ミズリナ行のバスに来る。パマガニヨンの岩壁を過ぎると、すぐにクリスマタウの大キナ壁が目前にせまる。右にソラビスを眺

人六月二十一日

朝六時にテントを出て、まずは午

め、約三十分でミズリナ着。小さな潮がある。先に着いていた碧陵山荘の人に手伝つてもらい、キヤンア会まで荷を運ぶ。

始めにと、カティー二へ行く。素的な森を抜け、ゾグザグのゆるやかな道を登り、約二時間かかるて、サビ才小屋に着く。小さいが立派な小屋

大きく、実に四百メートルはある等  
があつた。それでも難しい所には  
、鉄のハシゴが取り付けてあり、ま  
ずは快調に登り、頂上に立つことが  
できた。頂上からの眺めは、また  
く素晴らしい。岩は木の山、又山は  
木りである。

下りは順調に下り、元の雪渓に降り立つ。雪渓を再び登り、一つの小さなコルに着く。

小十、なキャンプ場に我々のテント  
も加えて合計三張。いつも静かである。  
雨も上りドライ・ナンネが見え  
る。すぐ右手上方には、カティーン  
の岩峰群が何<sup>ハ</sup>げる。良い所<sup>ハ</sup>である。

である。小屋の娘とその弟と思われる二人が、びっくりして我々を見てゐる。恐ろく、我々はここへ来た最初の日本人であろう。小屋でお茶を飲んでひと休みした後、再び歩き出す。雪渓に入る。両岸とも切り立つた壁で、この一つでも良いから、日本にあ、たうと、まつたくうらやましい気持になる。

雪渓の中程から、今回最初のピークである、チマ・カディー二の北東ヒークに取り付く。登つてみると、小さいと思っていたこの壁が意外に

り切つて行つたち、何のことはない  
、目の前はストンと切れ落ちていて  
、その下は広い平原である。ひどく  
ガツカリしてしまつた。ます下れす  
所を捜す。急な草付の壁を降りて、  
下の平原に下り着く。

平原とりつても、背の低い木がビ  
ラシリ生えており、大変歩きずらい  
。なんとお道に出るばと急ぐが、思  
うにまかせない。疲れきつて、やつ  
と道に出て一休み。とつておきの、  
パンの缶詰を取り出して食べる。  
ダラリーと緩く道を、足をひきず  
りながら歩き、やつともう一つのコ  
ルを越えると、そこで待望の湖が見  
えた。モミの林の中を下つて、湖の  
側まで着いた途端、ノビてしまつた  
。テントを出てから、又テントに戻  
つて来るまで、遠々十二時間歩きつ  
ばなし。ほんの半日のつもりが、え  
るい强行山行になってしまった。

人大月二十二日／

一日中寝ころんで過ごす。キャン  
プ場の持主の家がバーになつていて  
、そこへ行つて子供達と遊ぶ。  
碧枝の二人は、チシネまで荷上げ  
して、そちらへテントを移した。

人六月二十三日／

早朝四時出發で、ドライ・チシネ  
へ行く。二時間歩いて、やつとオウ  
ロンゾウ・ヒュツテに着く。(ここが  
ロテンネの裾を回り込んで北面へ行  
く。大変寒い日であった。

取付で又モヤ碧枝ペーテイに会う  
。彼等も同じ北壁カント(注)現地では  
、ティボーナカンテのまだ通りがいい)。彼等

に先行してもらひ、我々はノンビリ  
と後を追う。難しかつたのは、最初  
のニビツチと、最後の一ビツチだけ  
である。落石が多いのには閉口した  
。頂上まで二十ピツチ。頂上には先  
に着いた碧枝ペーテイが待つていて  
くれ、南面を一諸に下る。ルートがあ  
わるず苦勞。

の時ザイル

が取れず、そんな事でマゴーして  
いる内、彼等二人とはすつと離れて  
しまつた。麓に着いた時は、もうす  
でに夕暮で、急いで道具をしまい、  
オウロンゾウ・ヒュツテに向う。ヒ  
ュツテで夕食を済し、すでに暗くな  
つた中をミズリナへもどる。雨が降  
り出し、濡れネズミになつてしまい  
まつたくみじめな思いをした。

人六月二十四日／

今日は休養日。一日寝てすゞす。  
ペーの子供達が遊びに来る。相手に  
なつている内、すっかり仲良くなつ  
てしまつた。

人六月二十五日／

テントをしまい、荷をまとめ、ミ  
ズリナ発十二時のバスで、コルチナ  
へ向う。コルチナからバスを乗り換  
え、ボルザーノへ。ボルザーノには  
午後七時着。すぐタクシーで、カソ

いたの家へ行く。氏に会い、夕食を御馳走になり、色々と話しあく。宿泊には、すぐ隣のホテルを紹介してくれた。

人六月二十六日

ガツサー氏の奥さんへ名前はハイジ。宿泊には、すぐ隣のホテルを紹介しててくれた。

人六月二十六日

ガツサー氏の家で済す。彼の仕事の昼休み中、車で裏山に登る。町が良く見え、良い所である。ホテルへの帰りに、山靴を一足と、ハーケンを買つておく。

夜、ガツサー氏の山のクラブの会合に出席させてもろう。良く食べ、良く飲み、良く話し、そして笑う会合と見た。

人六月二十七日

ガツサー氏からは、頼まれて持つてきた、トランシーバー(注)正規の輸出ではなく、相手国にとって密輸入である)の代金を受け取る。

人六月二十七日

昼食を、ガツサー氏の家でます

のは日課になってしまった。午後、ガツサー氏の奥さんへ名前はハイジの実家へ行き、そこから、トランシーバー交信をやってみる。ガツサー氏どうも入りが悪い(注)スケルチ回路つまり難音を消す装置の取り扱いの不備)と、しきりに、グチをこぼす。どうやら機嫌もあんまり良くない。

氏の仕事が終つて、一緒に車でローセンガルテンへ向う。夜の十時頃、山小屋(注)ガツサー氏所属のクラブの山小屋)、ベルガー・ヒュッテに着く。今日から十日間程は、ここが我々の宿となる訳である。

ガツサー氏は下つて行つた。明日、ハイジをつちへよこすと言ひ残して。あまり気に止めずに聞き流しておいた。

—— 一つづく ——

ガツサー氏は、すぐにトランシーバー交信。士ほど隻に入つたと見え、ゆうべ、二十五キロ(注)説明書によると直線二十キロまで通話可能とある。離れた、自分の家と交信をやってみたら、実に良く聞こえたものだから、今日は大変機嫌がよろしい。

小屋で休んでいる内に、外は雪になる。今日はこれでオジヤン。又来大時と同じルートを下つて、ベルガルテンへ向う。

夜ガツサー氏は下つて行つた。明日、ハイジをつちへよこすと言ひ残して。あまり気に止めずに聞き流しておいた。

六月二十九日より九月一日までは次号、20号に掲載いたします。よろしく。

三人でバイオレット・ツルム(注)イタリア語読みはトリーバイオレット、バイオレットは紫の意)へ向う。ローリーノ・パスへの岩場、約三百メートルを登り、アルベルト小屋(注)これはイタリア語読み、ドイツ語読みもある)に着く。

明治四十三年二月二十日  
発行所  
浦和漫遊山岳会

溪  
棲

六  
19号

昭和四十五年二月二十日  
浦和漫長山岳会  
浦和市領家一一一五  
才19号

山縣考彙

發行責任者 會長 山縣昌彥  
編集・審核 牧野要雄

# 昭和43年度浦和渓谷山岳会総会報告

昭和44年3月31日  
於東高砂町自治会館

◆準会員から正会員への昇格

会則により山沢典子さん正会員に昇格。

◆退会について(会員の整理)

役員会決定より宮本貞雄・今井大輔氏退会。

◆新人の受け入れについて、

「山と渓谷」4月号に募集ケイサイ。

◆県岳連・市岳連報告

岳連発行、身分証明証配布。

◆昭和43年度会計報告

会計係・清水英男氏より有り、会長、会員の承認を得る。

◆昭和43年度反省及び昭和44年度への要望

装備点検には必ず参加。

山詰会開始時間厳守。

庶務、山詰会通知を早く。

新人の指導と旧会員の指導の両方のバランスをとる。

◆昭和44年度役員・リーダー会リーダー選出。

会長-----山縣昌彦

庶務係-----奥園義輝

会計係-----矢島 実

会報係-----牧野要雄

装備係-----鈴木孝雄

市岳連理事---山縣昌彦・菅野達也・清水英男・山崎定治

リーダー会チーフリーダー-----奥園義輝。

リーダー-----菅野達也・牧野要雄

山崎定治・吉野 武

吉田毅一

## 会員消息

※会友、龜江氏結婚いたしました。

※会員と会員が結婚、奥園氏と旧姓岡安さんです。新婚旅行はアルプスへ。

※会員木村さんが結婚され、新住所は会友住所録を。

※会員清水氏が結婚、新居は行田市です。

